
メイシティ

悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイシテイ

【コード】

N9905B

【作者名】

悟

【あらすじ】

武器が当たり前にある世界。士官学校生が巻き込まれた騒動。他サイトにて掲載した作品です。その時のカテゴリーはアクション。

始まり

ここは「フリージア王国」にある地方都市「メイシティ」

鳴り響く警報。

「向こうに行ったぞ！」

叫ぶ男達の声。

いくつもの足音が近づいてくる。

それを陰に潜んで待ち受ける。

後五歩…四…三…

陰から飛び出す。

「な…」

突然現れた僕に驚く男達。

探していた筈なのに何で驚くのか？

ま、僕にはどうでもいいけど。

柄のスイッチを入れ起動。

光る刃。同時に空気の焼ける匂いが広がる。

光る刃を見て我に帰ったのか銃を構えようとするが、残念ながら僕

の方が速い。

両手で柄を持って切り上げる。

この刃は飛び散る血さえも蒸発させる。

切り上げた刃。その場で刃を横薙ぎ一閃。

同時に二人が倒れる。

倒れたまま動かない男達。

「…ふう」

息を一つつく。何か視線を感じて上を見上げる。

監視カメラが僕を見ている。

警官達はこの光景を見ているのかな？

血を流し倒れている三人の男。その中心に立っている僕の手には僕

の背より高い柄。

その先には斜め上に向いた光る刃。

その姿はまるで、

「死神だな」

自分の様子を客観的に見るとそう見える。

まあ、今の僕にはその名がお似合いだ。

「ん？」

慌しい足音が近づいてくる。

どうやら新しい追っ手が来た様だ。

本番に向けた練習としてはこんなトコかな。

個々の能力や装備は段違いだけ。

その時は何人が犠牲になるのかな…

そう思うと血が騒ぐ自分に驚きつつ迎え撃つ。

高まる歓声。その中心に俺はいる。

目の前には剣を構えた男。

距離は…五メートルだ。

ジリジリと間合いを詰めてくる。

左手を相手に向けシールドの照準を合わせる。

剣を構え直し、グツと腰を落とす相手。

来る！そう直感して右手を左手に添える。

一気に地面を蹴り真っ直ぐに突進してくる。

左手のシールドを発射する。

ワイヤーに繋がれたシールドが一直線に相手に向って飛んでいく。

直線に飛ぶワイヤーを避けられる。

咄嗟に左手を右に振りワイヤーで突進を食い止めようとするが、そ

れも男は体を沈めてそれを避ける。

左手のグリップでワイヤーを巻き戻す。

地面を蹴った反動をプラスされた男のスピード。

間に合え…！

心の中で祈る。

ギリギリで間に合ったワイヤーで剣を受ける。

ギィ…ン。と骨に響く音。上から押さえ込まれる。

このままじゃ…

負ける。

負けず嫌い。と言うわけじゃないが今は負ける訳にはいかない。

押さえつけられてついに膝をつく。

相手の目を見る。

勝利を確信している様に見える。

それを見た瞬間、

…何故かやる気が出てきた。

よし。それなら、

スツと力を抜いて剣を滑らせる。

「あ…」

意外な行動に反応が鈍い。

その隙を突いて、

「とあ！」

相手の左足を払う。

が、相手がそれに気付いて後に飛ぶ。

俺も体勢を立て直す。

先程と同じ様に間合いを取る。

違うのは俺の構え方。

右手を前に、左手を後に。

じり…じり…と後に下がっていく。

間合いを取らないと…

「…」

微動だにせず、剣を正眼に構えて動かない。

こっちの出方を待っているのか？

それなら俺にも勝機がある。

俺のシールドでもギリギリの間合いまで離れる。

相手の構えに隙が見当たらない。

「フウ……」

目を閉じて気持ちを抑える。

冷静に、落ち着いて、深く静かに息を吐いて相手を見る。

目にはさつき見せた勝利を確信した目じゃない。始まった時と同じ様な緊張感を持った目だ。

考える。相手の虚をつくには……

接近戦は圧倒的に向こうが有利。

どうにかして俺の間合いに入らないと。

シールドの間合いは接近戦にある。それも剣の間合いの中。俺にとって十メートル近く伸びるワイヤーは牽制でしかない。一撃を避けて懐に入らなければ……

やるしかないよな。覚悟を決める。

キツと相手を睨み、突撃開始！

「はああ！」

避けられれば俺の勝ち。それ以外なら……

男も向ってくる。

「やつ！」

真っ直ぐに突き出される切っ先。

同時にワイヤーを発射。

グリップを操作してワイヤーの起動修正して巻き戻しそれに左手を引いてスピードを加える。

相手の突きを右に避け右手で相手を力一杯押す。

軌道修正されたワイヤー、巻き戻されるスピードに引き寄せる腕の力を加えて男の後方から襲い掛かる。

「……え、マジ？……がつ！」

鈍い音と共に倒れる男。

「そこまで！」

と、声が掛かり、

「勝者、詩月」

一部から沸き上がる歓声。それに手を上げて答える。

「礼っ」

男と握手を交す。

「頭…大丈夫？」

後頭部を抑えている男。

すぐに気を取り戻すとは、中々タフな奴だ。

しかし、自分でやったとはいえ痛そうだ。

「大丈夫だ。でも次は俺が勝たせてもらっよ」

「その時はお手柔らかに」

「言ったる。次は俺が勝つって」

ニヤツと笑い錬部場から下りて行く。

「詩月。早く下りて来いよ」

「ん、今行く」

クラスメイトに急かされて下りて行く。

「せっかくアンタが頑張ったのに優勝出来ないとはね」

「しょうがないだろ。皆が頑張った結果だし」

「うっ」

と、唸っているのはクラスメイトである大友瑠奈。

話しているのは、ついさっきまで行われていた「メイシティ仕官学校、体育祭」の事だ。

俺達のクラスは準優勝に終わった。

その事が気に入らないらしくさっきからこんな調子である。

「準優勝もすごい事だと思っけど…」

「甘い！まだ上があるんだから！」

気の強い琉奈らしい一言だ。

夕日に染まる商店街。琉奈の叫びが響く。

「皆見てるからさ…もうちょっと…」

声を抑えてくれると助かるのだが、長い付き合いだが今まで俺の気

持ちを考えてくれた事などあつただらうか？

「何！」

「あ、いや…何でも…」

キツと目を吊り上げ睨まれる。

大人しくしていれば美人なのに…

等と言つてしまつたら…

「…」

想像しただけで背筋が震える。

「…どうしたの？風邪？」

ぶるつと震えた俺を見て、今度は心配そつな目になつた。

「何でもないよ」

「ホントに？」

「ん、大丈夫…」

ジーと顔を覗きこまれる。

「…昨夜、メイシティ郊外にある「メイシティ警察総合訓練所」で事故による火災が…」

電気店にディスプレイされている大型のテレビが映しているのは、

「これつて…あそこだよね？」

「…うん…」

夜空を赤く染めている場所はここから近くの山の麓にある警察施設。

「何たる…事故かな？」

「…多分」

まさか犯人が暴れた。何て事はないだろ。

「…警察の発表によると今回の火事の犠牲者は…」

「三十人も…」

これからも増える可能性がある。と締めくくつて、次のニュースへと変わつていった。

「帰ろつか」

「…」

何故かこのニュースが頭に残つた。

「どうしたの？ 怖い顔して」

「…ん」

「気の無い返事だね」

別に怒る訳でもなく、ただじつと顔を見ている。

その視線に気付いてはいたが、顔を向ける事は無かった。

「どーん！」

「うわっ！」

後から、明らかに故意にぶつかってくる、

「よっ」

妹の千佳。

「よっ」

倒れた俺を無視して仲良く挨拶してる。

「…大袈裟だね」。 錬武で優勝したんだからさ」

「…千佳…」

ゆっくりと起き上がりニコニコ笑っている千佳を睨む。

「お前…子供じゃないんだからさ」

「可愛い妹のお茶目な挨拶だからさ。 気にすんなよ。 なあ、兄い」

悪気がまったく感じられない。

千佳は俺の事を「にい」と呼ぶ。

「お兄ちゃん」が縮まってそうなったと本人が言っていた。

「千佳ちゃんも頑張ったよね」

「あれ位で頑張ったとは言えないですよ」

ブンブンと胸の前で手を振っている。

チラッと俺を見て、

「兄上と比べたら私なんてとても、とても…」

千佳も錬武女子の部の優勝者。

この目は俺をからかっている。

「それなら、琉奈さんも…」

「いえいえ、私なんてお二人に比べたら…」

痛む腰を抑えて、

「帰ろうよ」

商店街のど真ん中で話しこんでいるのは迷惑以外の何者でもない。

「じゃ、買い物して行くから。付き合え」

「…何買うの？」

「夕飯の材料」

言い終わる前にスーパーに向い歩いて行く千佳。

「じゃ、お呼ばれされよう」

と、琉奈も続いていく。

「お呼ばれは誘う方が言う言葉じゃないのか？」

俺の声は商店街の雑踏にかき消された。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様！」

千佳は何故かこの言葉を言う時に妙に力が入っている。

シユタツと席を立ち、皿を一杯に抱え流しへと運ぶ。

千佳との二人暮らし。炊事洗濯は妹の担当で、

俺は掃除担当だ。

「手伝おうか？」

「いいよ。テレビでも見てなよ」

当然の様にソファに寝転がりながらテレビを見ている琉奈。

「おい。寛ぎすぎだろ」

「気にしない。気にしない」

そう言われたら何も言えない。

俺もソファに座りテレビを見る。

「今日はこればっかだね」

ニュースはさつき見た軍の施設の事を話している。

「つまんない。ネット見よ」

勝手知ったる他人の家。

手際よくネットを繋いで何やら検索開始している。

「何か面白い事は無いかな」…あ

さっそく何かを発見した。

「…ん…？」

琉奈の声に緊張している事を感じて画面を覗く。誰がアップしたのかは解らないがさっき見ていたニユースの事が映っていた。

それは監視カメラの映像。

そこに映っていたのは、俺達より少し上の年頃の男。目はこつちを見ている。その顔は微笑んでいる様にも見える。手には自分の背よりも長い物を持っている。それを振り上げ…

「…」

そこで途切れた。

「…あの後は…」

あまり想像したくは無いが…

「ニユースよりこつちの方が早く出てたね」

「そりゃ、ニユースは色々規制とが掛かってるんじゃないの」

「指名手配、かな」

「そりゃそうだろ」

「でも、名前も何も解らないんじゃない…」

「顔は解っているんですから」

いつも間にか来ていた千佳。

「顔だけじゃ…」

無理。とは言わないが、現実的では無いよな。

静まる我が家のリビング。

「もうすぐ軍の偉い人が来るのにこんな事件が起きたんじゃない…」

「それまでに解決するんじゃない？」

「そうだといけど…」

「お。国家権力に懐疑的な発言だね」

「難しい言葉知ってるな」

「馬鹿にしてる？」

目が恐いぞ。琉奈。

「…おっと、もうこんな時間か」

時計を見て文字通り飛び起きる琉奈。

「じゃ、帰るわ」

シユタツと手を上げてバッグを取り玄関へと向う。

「待て。送ってくよ」

流石にあの映像を見て、女の子一人に夜道を歩いて帰らせる訳にはいかない。

「ん、あ、…ありがとう」

珍しく礼を言う琉奈。

コイツも少しは恐いと思っているのだろうか

「コレ。持ってく？」

後から千佳がシールドとバッグを持って追いかけてきた。

あの映像が頭にこびりついて離れない。それに…商店街で初めてこの事を知った時に感じた悪寒。

それを振り払う為に、

「ありがとう」

受け取ったシールドをバッグにしまう。

襲われる訳は無いだろう心で思う。

と、同時に襲われないという保障が無いと予感が言う。

これを持ったからといってどうにかなる様な相手じゃない事は解っているが…

「さ、行こっか」

いつもと変わらない琉奈の声に我に返る。

「ん」

ま、近いから…大丈夫だろ…

自分にそう言い聞かせて家を出る。

…甘かったかな。

流石。と言うべきかな。もう僕を見つけた。

さっき見つけた僕のアジト、と言うべき場所があっさりと見つかった。

窓ガラスを突き破つての襲撃。

「おっと…」

咄嗟に武器を取り、起動させて食い止める。相手が持っているモノを見て驚く。

「へえ、キミは生き残り？」

相手が持っているのは真っ直ぐな棒だ。

「それは槍だよな」

「…」

答えない男。ま、形を見れば誰だって解る。

「お前がやったのか？」

「質問の意味がよく解らないんだけど」

「昨夜の施設襲撃はお前がやったのかと聞いている」

「監視カメラを見たんだろ？」

「なら、お前を拘束する」

薄暗い室内に二つの光。

相手の顔は見えないが殺気に満ちた目を僕に向けている。

「これから先こんな事がずっと続くのか…」

そう思うと嫌になつてくるよ

「それは無いな。お前はここで…」

真っ直ぐに向つてくる。

「捕らえられるのだから！」

リーチは同じ位かな。だが、突きと払いでは動作が違う。当然相手に届くスピードも当然違う。

でもそれを補う技術と覚悟が僕にはある。

僕に切っ先が触れる瞬間、体を反転させて、

「でも、それが楽しみでもあるけどね！」

がら空きの背中に一撃を加える。

吹き飛ばす男。

「ガッ…」

コンクリートの壁に叩きつけられて痛そうだ。

「どつする？まだやる」

聞くまでも無い。相手はやる気だ。

無言で立ち上がり、刃を僕に向ける。

「…」

ブーン。と刃が光を放つ。

「捕らえるんじゃないの？」

最初からそんな気が無かったのは解っていたけど僕はおどけて両手を広げる。

「…」

無言の男。体中から殺気が漲っている様に見える。

「ふう…やれやれ。大人しく僕の事を見逃してくれたら」

言い終わる前に、

ダンッ！

身を沈め、地を蹴り真っ直ぐに向ってくる。

「解りやすいね」

僕もスイッチを入れ、刃に光らせる。

僕の間合いに届いた瞬間に横薙ぎ一閃。

「…甘い！」

ギリギリの所で僕の視界から消える。

「…へえ」

思わず笑ってしまう。

左右、足元にはいない。となると…

体を弓なりに反らせた男がいた。

真っ直ぐに突き出される槍。

狙いは…左！

そう直感し、体を捻る。

刃の熱が顔の横を通っていく。

交わした瞬間、槍が横方向に襲いかかる。

ガキ…イイン。

お互いが武器の柄を境ににらみ合う。

しかし、体格で僕の方が不利だ。
グンツと力を入れられて離される。

僕は体勢を立て直そうとするが、向こうの方が速い。

一回転されて遠心力が増した槍の一撃で壁まで飛んでいく僕。

「大人しく言う事を聞いて言たら…何だって?」

背中が痛む。よろよろ鎌の柄を支えにと立ち上がり、

「…死なずに済んだのにな」

痛いのを我慢して強がりを言ってみる。

「今、自分が置かれている状況が理解できるか?」

自分の優位だと言いたいのか嘲笑う口調。

ま、これからやり返すけどね。

武器を構えなおし、息を吐いて、

「…行くよ」

一歩で僕の間合いに入る。

「な、…」

流石、と言うべきだろう。

咄嗟に突きを出すのが狙いが甘い。

軌道を見切り、鎌を振り抜く。

普通の人なら避けられずに体が二つになっている筈…

「片腕…無くなったね」

「……」

痛さのためか答ええない男。

「どうしたの? さっきの余裕は?」

槍を落とす、腕を押さえているが出血は止まらない。

「どうする? まだやる?」

もう男に戦意は無いだろう。

だが目にはまだ闘うと殺気が籠っている。

じっと構えたまま男を見る。誰に頼まれたのか、とか色々と聞いた
い事があるし。

「じゃ、殺さない代わりに僕の質問に答えて貰おうかな」

刃を消し男に近づく。

「そこまでだ！」

予想していなかった声に見上げると光が近づいてくる。

「わっ」

僕の本能が危険を告げる。それも最大級の警報を鳴らしている。

光は落ちてきたスピードのまま僕に向ってくる。

僕も鎌を起動させて迎え撃つ。

ガキ…イン。

お互いのビームが中和されて光の中央にある発生装置が音を立てる。

「不意打ちと…卑怯だね」

「気にするな」

グイグイと押してくる。

じりじりと焼ける空気。

じんわりと汗が出てくる。

「っはあああ！」

「グッッ」

ドン、と押されてまた壁に激突。

「っ」

強かに打ちつける背中。

その衝撃で手を離しそうになる。

だが手を離すわけにはいかない。

「うわっ」

慌てて頭を下げる。

壁から離れて体勢を整えようとしますが男のスピードがさせてくれな

い。

次々と繰り出される剣閃。

体を動かし、鎌を盾に避け続ける。

相手が疲れるのを待って逃げるのが一番だろう。この男は僕より強

い。悔しいが事実だ。

なら今ここで無理に闘っても僕が死ぬだけだろう。今できる最善は

逃げる事。そう判断して避け続ける。

「ハア…ハア…」

まったく化け物か？コイツは…

「どうした？もう逃げるのは止めか？」

休み無く剣を振っていたのに息一つ乱れてない。こつなつたら…

…あれ？もう一人の男はどこに？

切り落とした腕と槍も無い。

「アイツはさつきこの場から離脱したぞ」

人質作戦が実行する前に崩壊した。

「あ、そうなの」

努めて冷静に。次の手を考える。

背を向ければ後から、

打ち合えば前から斬られる。

さて、どうしたものか……

「ありがとねー」

無事に琉奈を送って家時につく。

大通りに出てほっとする自分がいる。

賑わう街。ニュースを知らないのか？

それとも自分には関係ないと思っっているのか？

いつもの様に明るい人達。

まるで自分だけが警戒しているかの様な気がしてくる。

だが左手のシールドを外そうとは思わない。

その時、

「チイツ！」

路地から飛び出してくる男。

手には鎌が握られている。

躊躇いなくそれを振りぬいて女の人が持っていた物を斬る。

「キヤー！」

悲鳴が飛ぶ。

回りにいた人達が我先にと逃げ出す。

一人が逃げれば次々と。

一気にそれが広がりいつもの街はパニックに陥った。

「貴様あ！」

「しょうがないだろう？僕はここで終る訳には行かないんだから」

二人の男が言い争いながらお互いの武器を振るう。

そこが中心になって人が居なくなる。

「しつこいね」。君は」

苛立つ男。

「なら大人しくしろ」

もつと苛立っている男。

数合打ち合う。

鎌を持った男は剣を持った男を押そうとするが離れない。

目の前で繰り広げられる戦闘。

二人の殺気が体に突き刺さる。

関わっては死ぬ。それは解りきった事なのに動けない。

「じゃ、仕方がないね」

鎌を持った男と目が合う。

「何を……」

剣をひらりと避けて俺の目の前に舞い下りる。

「人質だ」

光る刃。見ただけで自分に選択権が無い事を理解する。男の要求が

受け入れられない時はこのビームが俺を……

「……」

この男が施設を襲ったのだろう。

それを捕まえる任務を請け負ったのが剣を持った男。

……冷静に考えてる場合じゃない。

違う！落ち着け！冷静に……冷静に……考える。

「さ、どうする？彼を見殺しにするか、僕を見逃すか」
真剣な男の声。

どんなに鈍感な奴でも理解出来るだろう。

五十パーセントの確率でここで死ぬかも知れない事を。

「さ。どつち」

剣を持った男は微動だにしない。

「聞かせてくれるかな。君の答えを」

「…」

答えない。と、言う事は…

「彼を殺す。と判断しても良いのかな」

ちよつと待て。俺の意見も聞いてくれ。

「…お前が彼の首を切り落とす前にお前の腕を切り落とせばいい」

「出来るのかな？そんな事」

出来る訳無いだろう！そんな漫画みたいな事。

「…ふうー」

待て、落ち着け俺。こうなったら自分でこの状況を打開しよう。

いや、しなければ死ぬ。

とりあえず、状況は最悪だ。首から二十センチ暗い離れた所に光る刃がある。じんわりと熱を感じる。これは訓練でも遊びでもない。失敗すれば、「痛い」ではなく「死」しかない。一つじゃなくて一瞬でも間違えられない。

「ほら、彼の呼吸も死を感じて荒くなっているよ」

気にするな。落ち着け。これは剣を持った男を挑発しているだけだ。

相手が動かない限りはコイツも動かない。

…俺の希望だが…

「…」

考える。どうやってこの状況から抜け出せるかを！

「なるほど。僕の要求は受け入れられない、と」

首に感じる熱が強くなる。何か行動を起こせ！俺！

左手をそつと、バッグに忍びこませる。

「じゃ、そう言う事で」

「俺は自分出来る最善を尽くします」
鎌を持った男がこつちを見る。

気付かれた！

「なるほど。じゃ、何してくれるのかな」

「大丈夫、注意は俺より目の前の男にある。」

鎌を持った男が目線を目の前の男に向けた瞬間、バッグに忍ばせた手でシールドを操作し、真下に向ってワイヤー発射。

バッグを突き破り、地面に直撃。

ガキーン。と鈍い音が響いて、弾く。

弾いたワイヤーが男の顎、死角から襲いかかる。

「うわっ」

体を後に逸らして避ける。

その隙を逃さずに、鎌の刃から外れて距離を取る。

「つと…中々」

「喋ってる暇があるのか？」

剣士も間合いを詰めてくる。

「ほう…思ったよりいい反応じゃないか君」

「…どうも」

「ハアアツ！」。

「やれやれ…『騎士』と闘うとはね」

リーチで勝る分スピードで劣るかと思っただがそうではなかった。剣のスピードは目にも止まらなかったが、あの長い柄を同じスピードで振り回している。

幾つもの火花が飛ぶ。

「これ以上打ち合つと壊れてしまふな」

鎌を持った男は後に引くが剣士も前に進む。

「しつこいな」

「大人しくしろ。そう言っただろ」

「そうだったね」

笑うように答え後に引いていく。

その時、騒ぎを聞きつけた警官隊が駆けつける。手には銃が握られている。

それを確認し、背を向け、

「じゃ、僕はこれで」

警官隊に突入する男。

構えられた銃口に立ち向かう男。

「伏せるッ」

剣士は俺に飛びかかってくる。

直後に銃声と悲鳴が飛び交う。

一瞬の轟音。

剣士の肩越しから見える僅かな視界。

「君を甘く見ていたな」

血の海と硝煙の霧の中立っている男が一人。

鎌を持ち悲しげな瞳の男。

「あ、そうだ。君の名を聞いておこう」

鎌をスツと俺に向ける。

「…立花…詩月」

しっかりと目を見て答える。

「そうか…では詩月君。また会おう」

「いたぞ！あそこだ！」

新たに現れた警官隊を反対の方向へと走っていく。

「…」

おっと…呆けている場合じゃない。

「あの…」

庇ってくれた剣士に声を掛ける。

「…無事か…」

痛みで顔を歪めているがどうやら彼も無事なようだ。

「おかげさまで」

「済まなかった。今更謝つてもしょうがないが」

「いいですよ。あの場合は…」

ああするしか無いだろう。

「私がアイツを押さえたいればこんな事には…」

ゆっくりと体を起こし辺りの状況を見る。

割れたショーウィンドウ。

赤く染まった街路樹と歩道。

慌しく動く警官。

担架で運ばれていく警官達。

その内の一人が声を掛けてくる。

「大丈夫か？立てるか？」

「ああ…はい」

立ち上がるうとするが足に力が入らない。

「あれ？」

何度も立ち上がるうとするが全く力が入らない。

「ほら、手に捕まって」

先に立ち上がっていた剣士の手に捕まるがすぐに力が抜ける。

「しばらく休んだ方が良さな」

「じゃ、事情はその時に」

何やら話しているがよく聞き取れない。

ぼんやりと二人を眺めている。

敬礼して去っていく警官。

明らかに俺に向けた敬礼じゃない。

「大丈夫か？それとこれ」

「あ。はい」

体は大丈夫だが足に力が入らない。焼け焦げたバッグ。それとシールドから伸びているワイヤー。その途中が斬られていた。何時斬られたのかさえ覚えていない。

「張り詰めた緊張が一気に解けたから安心したんだろう」

俺の横に立って手伝う素振りも無く見ている。

「いいんですか？手伝わなくて」

「ん？私はあまり関係が無いと言っか…」
所轄が違うのか？

「ま、私は警官では無いしな」

「そうなんですか？」

「ああ」

じゃ、何者？聞こうとした時に、ケータイが鳴る。

「出ていいんですか？」

「気にする事は無いよ」

「じゃ…」

着信は…。

「はい…も」

「今何処に居るのー！ー！」

耳を劈く千佳の怒声。

「ちよつと聞いているの？」

キーンと鳴る耳でも聞こえる声。

余程の大声で喋っているに違いない。

思わず瞑った目を開けると近くの警官達が俺を見ている。

「……………」

そんな俺を見て忍び笑いをしている恩人。

まだ怒鳴っている千佳。

明日はご近所さん達に謝りに行かなければ。

千佳の怒声が収まってから事情を話す。

事情を聞いた千佳は、

「今から行く」

そう言って電話を切った。

待つ事十分。走ってきた妹の頬が上気している。

「ハア…ハア…」

「よお」

出来るだけ明るく、心配させない様に声を掛ける。

「ハア……」

息を整えてから俺を見る、目には涙が。「余裕だね。人に心配させ
といて」

「千佳ちゃん！詩月は？」

「あれ？何で」

家に送った筈の琉奈が来る？

「私が呼んだ」

「あ、そう」

「大丈夫なの？怪我してない？」
体をあちこち触る。

「ん、大丈夫。この人に助けてもらった」
横にいる人を紹介しようとして、

「お名前は……」

パン、と叩かれる。

「お前、名前を聞いとけよ。すいません。礼儀知らずな兄で
ペコペコ頭を下げる千佳。

「名前か、〓ハーメルだ」

「は？アルファ……ですか……」

聞き違いか？

「うーん……別にからかっている訳じゃ無いんだ。本名なんだ」

「そうなんですか」

「本当だぞ。ほら」

取り出して免許証。

そこには記号で『』と書かれていた。

「ホントだ」

「……ですか……」

何か由来でもあるのだろうか？

面倒くさかった……という理由だろうか？

気になるが、後者だった場合リアクションに困るので考えない事に

する。

「じゃ、君の連絡先を教えてもらおうかな」

「え」

何でだ？

「この馬鹿が何かとんでもない事をやらかしたのなら私も一緒に…」
酷い言われ様だ。

「そうじゃなくて…事情を聞きたいんだ」

「事情？」

「電話で言ったる」

「あれ？そうだっけ！」

もう一度話す。それを聞いた妹は、

「私が居れば…剣取ってきます」

好戦的な千佳。

「待て」

本気で行こうとする千佳を本気で止める。

「本っ当に大丈夫？」

改めて体を心配する琉佳。

「ああ、ヤツを相手にして無事だったのは私と彼だけだ」

「…偶然ですよ」

「そんな事は無いよ。極度の緊張状態であれだけ冷静に判断できた
んだからそれは必然だと思う」

「うーん…錬武大会で優勝したのはまぐれじゃなかったのか」

「そう言えば学生だって言ってたね」

「瑠奈…こっちは同級生で…こっちが妹の千佳です」

二人が頭を下げる。

「あの…そろそろ…」

警官が声を掛けてくる。

ちなみに無関係な二人がここに居るのも　さんが口を聞いてくれた
おかげだ。

「どう？大丈夫？」

「よつと」

「あれ？怪我無いんじゃない？」

「怪我は無いが…」

「言わないでいいですよ。さん」

「よろよろとした足で立ち上がる。」

「大丈夫です」

「なるほど…腰抜かしたんでしょ」

「うるさい」

千佳の的確な分析。流石だ。

「じゃ、とりあえず…連絡先聞いところかな」

「あ、はい」

名前とケータイ番号と住所を教える。

「歩いて十分位だね」

「走れば五分いらなですよ」

「何で走っていく？」

「じゃ、私はこれで…」

「あ、琉奈さん。送って行きますよ。ほら！行くよ！」

グイッと手を引っ張られて連れて行かれる。

「じゃ、また」

「あ、はい。…痛たたたた。引っ張るな。自分で歩ける」

「ヨチヨチ歩いてたら朝になるでしょ！」

くそ…言いたい放題だ…言い返せない自分が腹立たしい。

死神

「……………」
気付けば朝。

あれから何をしたのかはあまり覚えていない。
良く眠れたのかすっきりした頭と、

「っ……………」
起きようとして腕に力を入れるが痛みが走る。

その痛みが昨日の出来事を思いださせる。

訓練じゃ無い本物の戦闘。

武器を起動させ殺気を纏った人達。一瞬の油断が死を招く空間

「はぁ……………」

息を吐いてじつと正面を見る。

自分の部屋の壁に昨日の戦闘が再現される。

何度も繰り返される。

壁越しに妹の鼻歌が聞こえる。

それでいつもと変わらない日常を実感すると共に昨夜の出来事が現実だったと実感する。

「早く起きろー」

ドンドンとドアを叩く千佳の声で意識を戻す。

「今行く」

手早く着替えて朝食を取る。

テレビには昨日の事が流れていた。

「はぁ〜。凄いね〜」

箸を加えたまま見入っている。

「……………まったく」

我が妹ながら情けない。

と言いつつも俺も見入ってしまう。

「……………死傷者五人か……………良かったね。兄いは数えられなくて」

満面の笑みで言われてしまった。

「……………」

励ましてくれているのか、慰めてくれているのか。

……………どっちにしる悪意が無い事は確かだと思う。

「……………あれ？怒った？」

黙々と箸を進める俺を怒ったと思っっているらしい。

「……………別に」

「ほら。怒ってる」

気にして無いだろ。お前。

「も。短気なんだから。はい。これ上げるから機嫌直して」

ポン、と俺の前に置かれた漬物。

「……………」

黙ってそれに箸を伸ばす。

「……………ん？警官だけか？死傷者は……………？」

「みたいだね。兄だけじゃない？巻き込まれたの」

余程嬉しいのだろう。口元が緩んでいる。

「ご馳走様」

「あ！」

食器を運ぼうと立ち上がる俺。

それを見て慌てて朝食を掻きこむ。

時折何かを喋ろうとしているが、何を言っているのかさっぱり解らない。

まるで漫画の様な光景。

俺は立つたままそれを見ていた。

「……………お粗末様！」

飲み込んでから立ち上がり俺の持っていた食器を奪う様に取り洗いで行く。

何が千佳を突き動かしているのか？

……………考えても答えは出なかった。

「まったく、兄いの意地悪の所為で恥掻いた」
靴を穿きながらぼやく。

「俺の所為か」

「他に誰がいるの？」

「……誰？」

「いないでしょ？ だから兄いの所為って事になるの。と言っ事で」

「何でお前の靴を持たなきゃ行けないんだ」

「罰」

「何の？」

「私に恥を掻かせちゃった罪」

「お前何歳だ」

「兄いのニコ下」

どうやら本気らしい。目がマジだ。

仕方なく受け取る。

「じゃ、行こう」

元気良く出て行く千佳。

それに続いていく。

学校では昨日の事が広まっていた。

「モテモテだね」

肘で俺のわき腹を突く。

「……」

言い返すのもアホらしい。

「良かったね。じゃ」

俺から靴をひったくる様に取って教室に向う千佳。

「まったく」

「よっ！」

ドン！ と肩を叩かれる。

「痛った」

振り返ると琉奈が居た。

「おはよ」

「おはよう……」

「元気ないね？どうしたの」

「……」

「どうしたも何も……」

「自分でも解らん」

「ふーん。ま、昨日は色々あったし」

俺としては「色々」の一言では片付けられない。

「他人事みたいに言うな」

「他人事だし」

微笑みながらそう切り返してくる琉奈。

確かに、自分もそう言うだろう。

「はぁー」

「ため息吐いて無いで。ほら、行くよ」

先を走っていく琉奈。

俺はゆっくりと歩いて追いかける。

教室も昨日の事で盛り上がっていた。

その喧騒を出来るだけ無視して自分の席に向う。

「詩月も見た？昨日ニュース」

「ちらっと」

「まだ、この辺に居るのかな？」

「さあ」

心の中で間違いなく、と答えておく。

『そうか……では詩月君。また会おう』

昨日あの男が言った言葉を思い出す。

『また会おう』

その言葉が意味する事は一つ。

「おい！ どうした？」

「ん……何でもない」

考え込んでいた様だ。隣の席からの声で意識を戻すが、『また会う事になる男』の事が頭から離れなかった。

「席に着けー。授業始めるぞー」

一時限目の教師が来て授業が始まった。

六時限目が終わり帰り支度をする。

「立花。ちよつと……」

「はあ」

担任に呼ばれる。

席を立ち担任の所に向うまでに、

「何したんだよ」

等とからかわれるが、俺は何もしていない。

妹に何か起こったのか？しでかしたのか？

後者の方が可能性が高い。

「さあ。それを今から聞きに行くんだ」

「間違いないな」

俺の答えに笑うクラスメイト。

「お前に面会が着ているぞ」

「何処に居るんですか？」

「こつちだ」

担任に着いて行く。どうやら妹関連では無くなった。となると、謎は深まる。

俺に面会とは一体誰だ。着いた先は、

「理事長室……」

担任がノックし、中から声が聞こえる。

「失礼します」

「……失礼します」

妙に緊張するのは何故だ。

俺達を出迎えたのは、

「よお」

ソファに座り手を上げている、

「さん」

「早速だが昨日の事について話があるんだ。

じゃ、行こうか」

ソファから立ち上がり部屋を出る。

「はあ……」

とりあえずついていく。

校舎を歩く。

通り過ぎる生徒が皆振り返る。

「あの、さん」

「何だ」

「電話で呼び出してくれれば良かったんじゃない」

「ま、近いから来てみたんだが……迷惑だったか？」

「迷惑つて程じゃ無いんですけど……理事長や担任は知ってるんですか？」

「何を？」

「え。俺に会いにきた理由」

「言つて無いよ」

後で何て言えはいいんだ……

「あ、それと昨日の事は他言無用に願いたい」

「はあ……学校に対する言い訳を考えないといけないな……

「詩月。何したんだ？」

「玲斗か……何もして無いよ」

「ホントに？」

「ホントだよ」

この男は川瀬玲斗。家も近所で同じクラスで幼馴染だ。随分前に引

つ越してきてからずっと同じクラスという何とも言え無い縁がある

らしい。

玲斗は何が嬉しいのかニヤニヤしている。

「ホンマは何したんやっつて？」

この男はテンションが上がると方言を入れて喋る癖がある。

「だから、何もして無いって」

「嘘つけ。何もして無い奴が『騎士』と一緒にいるわけ無いやろ」

「え」

『騎士』……？

隣に立っている　さんを見る。

「言っつて無かつたか？」

「聞いてませんよ」

「そうだったか？はっはっは」

こっちは笑い事じゃないよ。

「騎士団」俺達が住んでいる「メイシティ」がある「フリージア王国」を含む四力国で形成される同盟間で活動する組織。入るにはそれなり……というか、かなりの能力が必要とされるらしい。

「意外というか……そうじゃ無いと言うか……」

「で、何したん？」

「俺としては君が、何故俺が『騎士』だと解ったのか聞きたい」

さんの雰囲気若干変わる。

それに気付かない訳は無いのだが玲斗はテンションを変えず、

「何故って……雰囲気とかそんなんですよ。……後、昨日の事で今度来るお偉いさんの護衛と言うか事前調査と言うか、そんな感じですよ」

目を見返して答える。

「……なるほど。まあ、俺も隠してた訳じゃないが……気になってね。少しナーバスになってるな」

上を見て息を吐いて心を落ち着かせている。

「……じゃ、俺から聞いていいですか？」

「何だ」

「詩月を連れている理由」

「お前には関係無いだろう」

「連れないな。詩月。そんな態度なら千佳ちゃんに言っぞ」

「グ……………」

別にアイツも事情を知っているから構わないのだが「困るフリ」をして誤魔化した方がいいだろう。

「お」

天の助けか玲斗のケータイが鳴る。

「じゃな。玲斗」

「あ、ちよ……………」

電話に出ながら俺達を引き止めようとするが電話相手に何か言われている。

その間に俺達は学校から出る。

「ふう……………流石「メイシティ士官学校」の生徒と言っか……………」

玲斗の事で苦笑する　さん。

「アイツは昔から妙な所で勘がいいんでよ」

「じゃ、俺と君が一緒にいた理由も」

「多分」

気付いているだろう。聞きたかったのは、それが正しいかどうか。

それが理由だろう。

歩いて駐車してある車に乗り込む。

「……………何処に行くんですか？」

「とりあえず……………警察」

「はあ……………」

それを聞いて気が重くなる。

「大丈夫だって。ちよつと話を聞きたいんだ」

「……………まあ。断ら無いですけど……………そんな気がしてましたから」

ちよつと。で済めばいいけど

「そんな顔しないで。ほら。元気だして行こつ」

……………無理だよ。

「……………」

「疲れてるね」

「……どうも」

差し出されたコーヒーを受け取る。

一口飲んで、深く息を吐く。

「……」

「何か言われたのか？」

「え、別にそんな事は……」

無い訳では無いが……

「ま、何を言われたかは知らないが、あんまり気にすんなよ」

バン、と肩を叩かれる。

「……目的は何なんでしょうね」

「……さあな」

あの男。

鎌を振り回し敵と認識した者には躊躇わずに刃を振り下ろす。

血を見る事を楽しんでいる風には見えなかった。あの男からは信念で闘っている印象を受けた。

軍や警察。国家を相手に闘いを挑むほどの信念。

玲斗では無いがそれには興味がある。

それを知ると言う事はもう一度会つと言う事。

それが意味するのは……昨夜の戦闘を繰り返す事。

「目的が何であれ俺は奴を捕らえる」

「……」

さんの目に迷いは無い。

「そこで君に頼みがあるんだ」

「……」

「あの男は君に興味がある様だ。で、あの男から何らかのコンタクトがあつたら連絡して欲しい。無理にと言わないが」

「はあ……」

連絡を取れない状況など想像したくは無いがその可能性もある。

そんな状況で連絡しようものなら……

「……状況にもよりますけど」

「それで構わないよ。それと……矛盾しているしこんな事言える立場じゃ無いかも知れ無いが危険な事は出来るだけ避けてくれ」

「そりゃ……」

言われなくても。

「ま、君なら上手く立ち回れるだろう」

「昨日の事は偶然ですよ。不意をつけましたから」

「謙遜だね。行動を起こした勇気が君にはあるだろう」

「買い被りですよ」

「自分の評価が低いな。ま、高すぎるのも考えものだし……それ位の方がいいかもな。じゃ、今日はありがと」

「もう帰っても……」

「いいよ。送っていくよ」

「いいですよ。家はここから近いですから」

「そう。じゃ」

「失礼します」

挨拶をして警察署をでる。

空が赤く染まり始めている。

早く帰らないと妹に何を言われるか……

行き交う人波に乗って歩を進める。

それ程人がいないのは昨日の事件の影響だろう。

「やあ、警察の話は済んだのかな？」

振り返るとそこには、

「何だ……琉奈か」

「何だとは何だ。心配してやったのに」

「心配してやった……て。琉奈が心配するような事は何もして無いよ」

二人並んで歩き出す。

「昨日は？」

それを言われると答えに詰る。

「まあ……不可抗力と言うか」

思わず顔を背ける。

「反省しているなら警察での事を話さない」

「……野次馬根性だけじゃないか」

「まあまあ、いいからいいから」

「別に……何も変わった事は」

とりあえず、呼ばれた理由は昨日の事の確認程度だった事を伝える。

「それだけ？　さんだっけ？　昨日の。その人から「協力してくれな

いか？」とかは？」

「ある訳無いだろ」

「協力してくれないか？」を　さんの声を真似しているが微妙に似ている様な気がする。

「え〜。つまんな〜い」

一気に興味が無くなった様だ。

「常識で考えろ。警察があんな危険な事に対して一般人に協力を要請すると思うか？」

「だって、情報提供とか」

「あくまで第三者。間接的に協力して欲しいだけ。それ以上は関わって欲しく無いの」

「え〜」

納得しない。まるで子供の様な駄々をこねそうな勢いだ。

「でも、千佳ちゃん剣を持って歩こうか言って言ったよ」

「何で？」

「……頼りないからでしょ」

横目で俺を見る。

「そんな事無いですよ。昨日は勇敢でしたよ」

意外な声に驚き振り返る。

「やあ」

にこやかに微笑む男が立っている。

その姿を見て間合いを取り、琉奈を庇いつつ前が出る。

「そんなに殺気立たなくても」

苦笑する男。

「誰、なの……」

殺気立つ俺の後で戸惑う琉奈。

「そちらは……始めまして。僕は……そうですね。」

『死神』……とでも言っておきましょうか」

その言葉でこの男の事が理解できる。

「……何の用ですか？」

「別に、見かけたから声を掛けただけですよ。ほら。何も持って無いでしょ」

確かに男は武器を持っている様子は無い。

だが、油断は出来ない。

「ふー。そんな殺気だたれては話も出来ませんね。では。また詩月君」

そう言っただち去る男。

「……何だったの？」

「俺が聞きたいよ」

僅かなやり取りで体中から汗が噴出していた。

自らを『死神』と名乗った男が立ち去ってから、何も喋らず歩いていく。

昨日とは全く違う男。

「……ねえ。ホントに」

見上げる琉奈の顔は半信半疑と言った所か。

そんな琉奈を見ながら黙って頷く俺。

振り返り男を確認しようとするがもういない。

いないはずの男の背中を確認しているのか首を捻っている。

「人は見かけによらないと言っか……」

「全くだ」

その事は昨日嫌って程実感した。

「でも、何でアンタの名前知ってたの？」

「ああ……」

名前を伝えた事を教える。言われる事は解っている。一步前に出て、振り返る。

「はあ。馬鹿じゃ無いの？」

「……返す言葉も無い」

「『死神』に魅入られちゃったね」

「何がそんなに嬉しいんだ」

「いや」

にやけながら頭を掻く琉奈。

「この」

手を伸ばすがひらりと後に避けられる。

「あはは……気をつけなよ。じゃね」

琉奈が交差点を曲がっていく。

琉奈の顔からは笑顔が消えていた。

「……」

琉奈の背中を見送ってから俺も家に向って歩き出す。

「さ、行くよっ！」

玄関を開けた直後、剣を携えた妹が仁王立ちしていた。

「……何してんの？」

「兄を迎えに行こうとした所」

「……「ソレ」持って？」

千佳の手には妹自慢の一振りの剣が握られていた。

「当然。敵は強者。これ位の装備は当然」

胸を張る妹。

『リ・エイト社製限定モデル「燎原ノ焰」レプリカ』

赤色鋼で作られた為赤く光る剣。

神話時代に『火を識るもの』と呼ばれる神様の娘で『知恵と勝利の

女神、ユヰナ』が敵対する巨人と闘う時に使ったとされる神剣が「燎原ノ焰」と呼ばれている。伝承に残るその形を再現したのが千佳の自慢の一振り。

軽く扱いやすいが値が張る為に今まで一度も使った事が無い。というか、限定品。コレクターアイテムなので使う奴はいないだろう。それを持ち出してくるとは……妹の優しさが正直嬉しい。多分、他にも理由はあるだろうが

「ま、私も一度使いたかったし」
「そうだろう。声が本当に嬉しそうだ。」

思った通りだが何故か嬉しさが半減した。

「ほら！行くよ！」
ベルトに通したホルダーに剣をセット。

「……………」
黙って横を通り抜けようとしたが、腕をがしつと掴まれ、外に連行される。

「安かったね」
「晴れやかに笑う妹。」

スーパーでの買い物帰り、両手に荷物を持っている俺。

「さ、早く帰ろう」
「……………」

先を歩く妹。その影を追いかけて行く。

「よ」
自転車に乗ってどこかへ行く途中の琉奈と会う。

「琉奈さん」
「あはは。ホントに持ってるんだ」

千佳の腰にある剣をマジマジと眺める。
「チャキ、と構えて、」

「いいでしょ？」

凄く自慢げな千佳。

「いいなあ。私も『猛ル龍ノ嘶キ』並んで買えば良かったな。」

琉奈の言う『猛ル龍ノ嘶キ』も『リ・エイト社』の限定モデル。

「極寒の中、徹夜で並びましたから」

「そこまでやるか？って感じだけど。ていうかライフルもあったのか？」

「当然」

胸を張る千佳。

そりゃそうだよな。

かなりのシェアを持つてる武器メーカーだし。

「欲しい物を手に入れるのに手間は惜しまないのが私の生き方」

言い切ってしまう千佳。

「俺にはよく解らん」

「例えば、兄いの欲しいタイプのシールドが出て、それを手に入れるには徹夜しないといけないとしたらどうする？」

「開店時間に行く」

「それじゃ買えないよ。徹夜で並んでるんだから」

「予約する」

「それも駄目だったら」

「諦める」

「並べ。徹夜で」

「嫌だ」

「根性無し」

何でそこまで言われなきゃいけないんだ？

「別に用途や性能は対して変わらないんだから武器なら使い手の腕の差でどうとでもなるだろ」

「フォルムとか色とか、こだわりは無いのか？」

「うん……無いなあ」

「マジで……」

「そんな驚くような事か？」

「好きな色とかあるでしょ？」

「好きっていうか……まああるかな」

「だったら、その色を使ってるシールドが欲しいとか思わない」

「いや……別に」

ペチン。と自分の額を叩く千佳。

「もうちょっとさ。見た目とかに個性を出そうよ」

「お前はどこの回し者だ」

「どこでもいいよ」

話にならないとお手上げの千佳。

妹の態度が微妙にム力つく。

「大体だな。色とかそんな事で強くなる訳無いだろう。そりゃ、気に入った色で強くなるなら俺も徹夜で並ぶけどそんな事は無いだろう」

「屁理屈って知ってる？」

それはお互い様だと思う。

が、言ってしまうと後が恐いので言わないでおく。

「で、お前は何処行くんだよ？」

話を変える為、琉奈にふる。

「ん？私はこれの調整に……」

肩からぶら下げているライフル。

「壊れたのか？」

「ちよつとがたついている気がするし」

「あ、そうだ。俺も買いに行かないと。壊れたから」

「何時？」

「昨日に決まってるんだろ」

「何だよ」

事情を説明。

「じゃ、今度見に行こう」

「いいよ、一人で行く」

「でも、あそこのショップはシールドはあんまり無いよ」

「マニアな武器使うなよ。兄い」

「うるさい」

「あはは」

俺達の会話を聞いて笑う琉奈。

「でも、琉奈さんバッテリーも買うんですか？」

「それは…予算と相談」

バッテリーとは武器のエネルギー、動力源の事だ。銃系なら弾の事だし、剣や槍ならビームの展開時間や強弱を調整するのに必要なエネルギーだ。俺のシールドは後者に属する。

これが無いと起動は出来無い。シールドは発射も出来ない。

琉奈はライフルを得意としている。

百発百中とはいかないが命中率はかなりのものだ。

「早く直した方がいいですよ。いざという時に壊れちゃったら大変な事になりますよ」

「何だよ。そのいざという時ってのは」

「昨日の犯人と闘う時」

「アホ。何で一般人の俺達があんな危険人物と関わらなきゃいけないんだ」

「それはそうだけど……」

俺達に関わらないでいようとしても、『死神』は何故か俺に興味をもっているらしいから嫌でも会う事になるだろう。

「でも、念の為って事もあるし」

「それもそうだけど。…闘わないのが一番良いだろう」

士官学校の生徒の言葉としてはどうかと思うが、避けられる闘いは避ける。これも兵法だ。

「そうだけど……」

俯く千佳。

「お前の気持ちは嬉しいけどお前が怪我でもしたらどうする？」
俯いたままの千佳の肩に手を置いて、

「帰って飯にしよう」

「……」

歩き出す千佳。

「じゃ、琉奈」

琉奈に声を掛けて癒えに帰る。

「おう」

手を上げて答える琉奈と別れる。

家に着くまで俺も千佳も喋らなかつた。

それは食事が終わった今も変わらない。

無言のまま食器を片付ける千佳。見る気は無いがテレビを点ける。

昨日の事がニュースになっている。

そして、どこかの識者があの男「死神」の行動について分析している。

「……合ってるのかな？」

食器を洗い終わった千佳が二人分のお茶を持ってきて隣に座る。テレビで喋っている識者の言葉を聞いている。

「……さあ」

そう答えたが、心の中では「違う」と明確に否定できる自分がいる。

『死神』は愉快的な行動じゃないのは確かだ。

「あれ？昨日の事件で通行人に怪我人無し？」

「え」

千佳の声に思考を止めて画面を見る。

フリップには確かにそう書いてあった。

昨日の事を思いだす。

……

確か……「死神」が通行人の持っていた荷物を斬ってパニックになつて……

「無差別テロじゃ無いのは確かだ……て結果見れば誰でも解るよ」
結果から推測する識者の言葉に笑う千佳。

テロとは違う気がする。警察施設を襲ったのは紛れもない事実だし、そう言えない事は無いだろうが……
それから識者の意見を聞いていたが、まとめて見ると「よく解らない」と言う事だった。

「これでお金貰っちゃ駄目でしょ」
辛辣な千佳の批評。この批評があらゆる家庭で行われているのだろう。

「で、兄い。警察での話は何だったの？」
「…知ってたの？」

驚いてお茶を噴出すような事はしない。

「玲斗君が言ってた」
アイツ…

口止めていない俺も俺だが、口止めた所である男は聞かれなくても嬉嬉として喋るだろう。

「で」
逃げようとしたが、真剣な妹のから逃げられないと悟る。

「えっと…」
悪戯を見つけた子供が言い訳を考える様な心境で警察での事とその帰りに琉奈と一緒に「死神」と会った事を話す。

「…」
怒鳴られると思ったが妹は静かにお茶を飲んでいた。
その様子が恐怖を煽る。

千佳がコップをテーブルに置いただけで高まる鼓動。

「で」
「え、それだけ……だけど……」
声に感情が無い。

「警察に連絡したの？」

「まだ……」

「……」

手で「電話しろ」と示される。

黙って頷いて警察に掛け、　　さん呼び出してもらう。

「あ、どうも。詩月です」

「どうした？」

「えつとですね。さっき別れてすぐに『死神』と会ったんですよ」

「『死神』？」

「あ、『死神』って自分で名乗ったんですよ」

微妙に話が合わない。

「誰が？」

「昨日鎌を振り回していた男が」

これで理解できた　　さん。

「自分で『死神』って名乗ったのか」

「はい」

「馬鹿にしているのか？あの男は」

「している様な、していない様な」

微妙な問題だな。

「　　さん。聞いていいですか？」

「何だ」

「『死神』の目的って何だと思えますか？」

受話器の向こうから聞こえるのは人が動く音だけ。

「……………さあな。俺には解らん」

数分の沈黙の後そう答えが返ってきた。

「それだけか？」

「あ……………はい」

「気をつけてくれよ。どうやら君は「死神」に魅入られたようだか

ら

「それ、さっき言われました」

「そうか？……………また何かあったら連絡してくれ」

電話を切る。

「……………」

「じゃ、私は風呂に入ろっかな」

電話の内容を聞こうとすると思ったが千佳は立ち上がって風呂へと向う。

「……………」

一人になると色々と考えてしまう。

頭に繰り返される一つの言葉、

『死神』に魅入られた。

琉奈と　さんの声で繰り返して聞こえる。

その言葉から恐怖と共に興味を感じる。

『死神』が何を目的としているのか？

それを知るには『死神』に直接聞くのが一番速い。…………出来れば、の話だが。

『死神』が俺に興味を持っているらしいのは間違いない。

近いうちにまた会う事になるだろう。

…会いたくて会いたく無いと言っのが俺の正直な気持ちだが……………」

……………」

気付けば朝。

あれから何をしたのかはあまり覚えていない。

良く眠れたのかすつきりした頭と、

「っ……………」

起きようとして腕に力を入れるが痛みが走る。

その痛みが昨日の出来事を思いださせる。

訓練じゃ無い本物の戦闘。

武器を起動させ殺気を纏った人達。一瞬の油断が死を招く空間

「はあ……………」

息を吐いてじっと正面を見る。

自分の部屋の壁に昨日の戦闘が再現される。

何度も繰り返される。

壁越しに妹の鼻歌が聞こえる。

それでいつもと変わらない日常を実感すると共に昨夜の出来事が現実だったと実感する。

「早く起きろー」

ドンドンとドアを叩く千佳の声で意識を戻す。

「今行く」

手早く着替えて朝食を取る。

テレビには昨日の事が流れていた。

「はあゝ。凄いね」

箸を加えたまま見入っている。

「……まったく」

我が妹ながら情けない。

と言いつつも俺も見入ってしまった。

「……死傷者五人か……良かったね。兄いは数えられなくて」

満面の笑みで言われてしまった。

「……」

励ましてくれているのか、慰めてくれているのか。

……どっちにしる悪意が無い事は確かだと思う。

「……あれ？怒った？」

黙々と箸を進める俺を怒ったと思っているらしい。

「……別に」

「ほらゝ。怒ってる」

気にして無いだろ。お前。

「もゝ。短気なんだから。はい。これ上げるから機嫌直して」

ポン、と俺の前に置かれた漬物。

「……」

黙ってそれに箸を伸ばす。

「……ん？警官だけか？死傷者は……？」

「みただね。兄いだけじゃない？巻き込まれたの」

余程嬉しいのだろう。口元が緩んでいる。

「〽馳走様」

「あー」

食器を運ぼうと立ち上がる俺。

それを見て慌てて朝食を掻きこむ。
時折何かを喋ろうとしているが、何を言っているのかさっぱり解らない。

まるで漫画の様な光景。

俺は立つたままそれを見ていた。

「…………お粗末様！」

飲み込んでから立ち上がり俺の持っていた食器を奪う様に取り洗いで行く。

何が千佳を突き動かしているのか？

…………考えても答えは出なかった。

「まったく、兄いの意地悪の所為で恥掻いた」
靴を穿きながらぼやく。

「俺の所為か」

「他に誰がいるの？」

「…………誰？」

「いないでしょ？ だから兄いの所為って事になるの。と言っ事で」

「何でお前の鞆を持たなきゃ行けないんだ」

「罰」

「何の？」

「私に恥を掻かせちゃった罪」

「お前何歳だ」

「兄いの二コ下」

どうやら本気らしい。目がマジだ。

仕方なく受け取る。

「じゃ、行こう」

元気良く出て行く千佳。

それに続いていく。

学校では昨日の事が広まっていた。

「モテモテだね」

肘で俺のわき腹を突く。

「……………」

言い返すのもアホらしい。

「良かったね。じゃ」

俺から鞆をひったくられる様に取りつて教室に向う千佳。

「まったたく」

「よっ！」

ドン！ と肩を叩かれる。

「痛った〜」

振り返ると琉奈が居た。

「おはよ」

「おはよう……………」

「元気ないね？どうしたの」

「……………」

どうしたも何も……………」

「自分でも解らん」

「ふーん。ま、昨日は色々あつたし」

俺としては「色々」の一言では片付けられない。

「他人事みたいに言うな」

「他人事だし」

微笑みながらそう切り返してくる琉奈。

確かに、自分もそう言うだろう。

「はあー」

「ため息吐いて無いで。ほら、行くよ」

先を走っていく琉奈。

俺はゆっくりと歩いて追いかける。

教室も昨日の事で盛り上がっていた。

その喧騒を出来るだけ無視して自分の席に向う。

「詩月も見た？昨日ニュース」

「ちらっと」

「まだ、この辺に居るのかな？」

「さあ」

心の中で間違いなく、と答えておく。

『そうか……では詩月君。また会おう』

昨日あの男が言った言葉を思いだす。

『また会おう』

その言葉が意味する事は一つ。

「おい！ どうした？」

「ん……何でもない」

考え込んでいた様だ。隣の席からの声で意識を戻すが、『また会おう事になる男』の事が頭から離れなかった。

「席に着けー。授業始めるぞー」

一時限目の教師が来て授業が始まった。

六時限目が終わり帰り支度をする。

「立花。ちよっと……」

「はあ」

担任に呼ばれる。

席を立ち担任の所に向うまでに、

「何したんだよ」

等とからかわれるが、俺は何もしていない。妹に何か起こったのか？しでかしたのか？後者の方が可能性が高い。

「さあ。それを今から聞きに行くんだ」

「間違いないな」

俺の答えに笑うクラスメイト。

「お前に面会が着ているぞ」

「何処に居るんですか？」

「こつちだ」

担任に着いて行く。どうやら妹関連では無くなった。となると、謎は深まる。

俺に面会とは一体誰だ。着いた先は、

「理事長室……」

担任がノックし、中から声が聞こえる。

「失礼します」

「……失礼します」

妙に緊張するのは何故だ。

俺達を出迎えたのは、

「よお」

ソファに座り手を上げている、

「さん」

「早速だが昨日の事について話があるんだ。

じゃ、行こうか」

ソファから立ち上がり部屋を出る。

「はあ……」

とりあえずついていく。

校舎を歩く。

通り過ぎる生徒が皆振り返る。

「あの、さん」

「何だ」

「電話で呼び出してくれば良かったんじゃない」

「ま、近いから来てみたんだが……迷惑だったか？」

「迷惑って程じゃ無いんですけど……理事長や担任は知ってるんですか？」

「何を？」

「え。俺に会いにきた理由」

「言って無いよ」

後で何て言えばいいんだ……

「あ、それと昨日の事は他言無用に願いたい」
「はあ……学校に対する言い訳を考えないといけないな…」

「詩月。何したんだ？」

「玲斗か……何もして無いよ」

「ホントに？」

「ホントだよ」

この男は川瀬玲斗。家も近所で同じクラスで幼馴染だ。随分前に引越してきてからずっと同じクラスという何とも言え無い縁があるらしい。

玲斗は何が嬉しいのかニヤニヤしている。

「ホンマは何したんやって？」

この男はテンションが上がると方言を入れて喋る癖がある。

「だから、何もして無いって」

「嘘つけ。何もして無い奴が『騎士』と一緒にいるわけ無いやろ」

「え」

『騎士』……？

隣に立っている さんを見る。

「言つて無かつたか？」

「聞いてませんよ」

「そうだったか？はっはっは」

こっちは笑い事じゃないよ。

「騎士団」俺達が住んでいる「メイシティ」がある「フリージア王国」を含む四力国で形成される同盟間で活動する組織。入るにはそれなり……というか、かなりの能力が必要とされるらしい。

「意外というか……そうじゃ無いと言うか……」

「で、何したん？」

「俺としては君が、何故俺が『騎士』だと解つたのか聞きたい」

さんの雰囲気若干変わる。

それに気付かない訳は無いのだが玲斗はテンションを変えず、

「何故って……雰囲気とかそんなんですよ。……後、昨日の事で今度来るお偉いさんの護衛と言うか事前調査と言うか、そんな感じですよ」

目を見返して答える。

「……なるほど。まあ、俺も隠してた訳じゃないが……気になってね。少しナーバスになってるな」

上を見て息を吐いて心を落ち着かせている。

「……じゃ、俺から聞いていいですか？」

「何だ」

「詩月を連れている理由」

「お前には関係無いだろう」

「連れないな」。詩月。そんな態度なら千佳ちゃんに言っぞ」

「グ……」

別にアイツも事情を知っているから構わないのだが「困るフリ」をして誤魔化した方がいいだろう。

「お」

天の助けか玲斗のケータイが鳴る。

「じゃな。玲斗」

「あ、ちよ……」

電話に出ながら俺達を引き止めようとするが電話相手に何か言われている。

その間に俺達は学校から出る。

「ふう……流石「メイシティ士官学校」の生徒と言うか……」

玲斗の事で苦笑する　さん。

「アイツは昔から妙な所で勤がいいんですよ」

「じゃ、俺と君が一緒にいた理由も」

「多分」

気付いているだろう。聞きたかったのは、それが正しいかどうか。それが理由だろう。

歩いて駐車してある車に乗り込む。

「……何処に行くんですか？」

「とりあえず……警察」

「はあ……」

それを聞いて気が重くなる。

「大丈夫だつて。ちよつと話を聞きたいんだ」

「……まあ。断ら無いですけど……そんな気がしてましたからちよつと。で済めばいいけど」

「そんな顔しないで。ほら。元気だして行こう」

……無理だよ。

「……」

「疲れてるね」

「……どうも」

差し出されたコーヒーを受け取る。

一口飲んで、深く息を吐く。

「……」

「何か言われたのか？」

「え、別にそんな事は……」

無い訳では無いが……

「ま、何を言われたかは知らないが、あんまり気にすんなよ」
バン、と肩を叩かれる。

「……目的は何なんでしょうね」

「……さあな」

あの男。

鎌を振り回し敵と認識した者には躊躇わずに刃を振り下ろす。

血を見る事を楽しんでいる風には見えなかった。あの男からは信念で闘っている印象を受けた。

軍や警察。国家を相手に闘いを挑むほどの信念。

玲斗では無いがそれには興味がある。

それを知ると言う事はもう一度会つと言う事。

それが意味するのは：昨夜の戦闘を繰り返す事。

「目的が何であれ俺は奴を捕らえる」

「……」

さんの目に迷いは無い。

「そこで君に頼みがあるんだ」

「……」

「あの男は君に興味がある様だ。で、あの男から何らかのコンタクトがあつたら連絡して欲しい。無理にと言わないが」

「はあ……」

連絡を取れない状況など想像したくは無いがその可能性もある。

そんな状況で連絡しようものなら……

「……状況にもよりますけど」

「それで構わないよ。それと……矛盾しているしこんな事言える立場じゃ無いかも知れ無いが危険な事は出来るだけ避けてくれ」

「そりゃ……」

言われなくても。

「ま、君なら上手く立ち回れるだろう」

「昨日の事は偶然ですよ。不意をつけましたから」

「謙遜だね。行動を起こした勇気が君にはあるだろう」

「買い被りですよ」

「自分の評価が低いな。ま、高すぎるのも考えものだし……それ位の方がいいかもな。じゃ、今日はありがと」

「もう帰っても……」

「いいよ。送っていくよ」

「いいですよ。家はここから近いですから」

「そう。じゃ」

「失礼します」

挨拶をして警察署をでる。

空が赤く染まり始めている。

早く帰らないと妹に何を言われるか……
行き交う人波に乗って歩を進める。

それ程人がいないのは昨日の事件の影響だろう。

「やあ、警察の話は済んだのかな？」

振り返るとそこには、

「何だ……琉奈か」

「何だとは何だ。心配してやったのに」

「心配してやった……て。琉奈が心配するような事は何もして無いよ」

二人並んで歩き出す。

「昨日は？」

それを言われると答えに詰る。

「まあ……不可抗力と言うか」

思わず顔を背ける。

「反省しているなら警察での事を話さない」

「……野次馬根性だけじゃないか」

「まあまあ、いいからいいから」

「別に……何も変わった事は」

とりあえず、呼ばれた理由は昨日の事の確認程度だった事を伝える。

「それだけ？　さんだっけ？　昨日の。その人から「協力してくれな

いか？」とかは？」

「ある訳無いだろ」

「協力してくれないか？」を　さんの声を真似しているが微妙に似

ている様な気がする。

「え〜。つまんな〜い」

一気に興味が無くなった様だ。

「常識で考える。警察があんな危険な事に対して一般人に協力を要請すると思うか？」

「だって、情報提供とか」

「あくまで第三者。間接的に協力して欲しいだけ。それ以上は関わ

って欲しく無いの」

「え〜」

納得しない。まるで子供の様な駄々をこねそうな勢いだ。

「でも、千佳ちゃん剣を持って歩こうかなって言ってたよ」

「何で？」

「……頼りないからでしょ」

横目で俺を見る。

「そんな事無いですよ。昨日は勇敢でしたよ」

意外な声に驚き振り返る。

「やあ」

にこやかに微笑む男が立っている。

その姿を見て間合いを取り、琉奈を庇いつつ前が出る。

「そんなに殺気立たなくても」

苦笑する男。

「誰、なの……」

殺気立つ俺の後に戸惑う琉奈。

「そちらは……始めまして。僕は……そうですね」

『死神』……とでも言っておきましようか」

その言葉でこの男の事が理解できる。

「……何の用ですか？」

「別に、見かけたから声を掛けただけですよ。ほら。何も持って無いでしょ」

確かに男は武器を持っている様子は無い。

だが、油断は出来ない。

「ふー。そんな殺気だたれては話も出来ませんね。では。また詩月君」

そう言って立ち去る男。

「……何だったの？」

「俺が聞きたいよ」

僅かなやり取りで体中から汗が噴出していた。

自らを『死神』と名乗った男が立ち去ってからは、何も喋らず歩いていていた。

昨日とは全く違う男。

「……ねえ。ホントに」

見上げる琉奈の顔は半信半疑と言った所か。

そんな琉奈を見ながら黙って頷く俺。

振り返り男を確認しようとするがもついない。

いないはずの男の背中を確認しているのか首を捻っている。

「人は見かけによらないと言うか……」

「全くだ」

その事は昨日嫌って程実感した。

「でも、何でアンタの名前知ってたの？」

「ああ……」

名前を伝えた事を教える。言われる事は解っている。一步前に出て、振り返る。

「はあ。馬鹿じゃ無いの？」

「……返す言葉も無い」

「『死神』に魅入られちゃったね」

「何がそんなに嬉しいんだ」

「いや」

にやけながら頭を掻く琉奈。

「この」

手を伸ばすがひらりと後に避けられる。

「あはは……気をつけなよ。じゃね」

琉奈が交差点を曲がっていく。

琉奈の顔からは笑顔が消えていた。

「……」

琉奈の背中を見送ってから俺も家に向かって歩き出す。

「さ、行くよっ！」

玄関を開けた直後、剣を携えた妹が仁王立ちしていた。

「……何してんの？」

「兄を迎えに行こうとしてた所」

「……「ソレ」持って？」

千佳の手には妹自慢の一振りの剣が握られていた。

「当然。敵は強者。これ位の装備は当然」

胸を張る妹。

『リ・エイト社製限定モデル「燎原ノ焰」レプリカ』

赤色鋼で作られた為赤く光る剣。

神話時代に『火を識るもの』と呼ばれる神様の娘で『知恵と勝利の女神、ユリナ』が敵対する巨人と闘う時に使ったとされる神剣が「燎原ノ焰」と呼ばれている。伝承に残るその形を再現したのが千佳の自慢の一振り。

軽く扱いやすいが値が張る為に今まで一度も使った事が無い。というか、限定品。コレクターアイテムなので使う奴はいないだろう。

それを持ち出してくるとは……妹の優しさが正直嬉しい。多分、他にも理由はあるだろうが

「ま、私も一度使いたかったし」

そうだろう。声が本当に嬉しそうだ。

「……」

思った通りだが何故か嬉しさが半減した。

「ほら！行くよ！」

ベルトに通したホルダーに剣をセット。

「……」

黙って横を通り抜けようとしたが、腕をがしっと掴まれ、外に連行される。

「安かったね」

晴れやかに笑う妹。

スーパーでの買い物帰り、両手に荷物を持っている俺。

「さ、早く帰ろう」

「……うい」

先を歩く妹。その影を追いかけて行く。

「よ」

自転車に乗ってどこかへ行く途中の琉奈と会う。

「琉奈さん」

「あはは。ホントに持ってるんだ」

千佳の腰にある剣をマジマジと眺める。

「チャキ、と構えて、

「いいでしょ？」

「凄く自慢げな千佳。」

「いいなあ。私も『猛ル龍ノ嘶キ』並んで買えば良かったな」

琉奈の言う『猛ル龍ノ嘶キ』も『リ・エイト社』の限定モデル。

「極寒の中、徹夜で並びましたから」

「そこまでやるか？って感じだけど。ていうかライフルもあったの

か？」

「当然」

胸を張る千佳。

「そりゃそうだよな。」

かなりのシエアを持つてる武器メーカーだし。

「欲しい物を手に入れるのに手間は惜しまないのが私の生き方」

「言い切ってしまう千佳。」

「俺にはよく解らん」

「例えば、兄いの欲しいタイプのシールドが出て、それを手に入れ

るのには徹夜しないとイケないとしたらどうする？」

「開店時間に行く」

「それじゃ買えないよ。徹夜で並んでるんだから」

「予約する」

「それも駄目だったら」

「諦める」

「並べ。徹夜で」

「嫌だ」

「根性無し」

何でそこまで言われなきゃいけないんだ？

「別に用途や性能は対して変わらないんだから武器なら使い手の腕の差でどうとでもなるだろ」

「フォームとか色とか、こだわりは無いのか？」

「う〜ん……無いなあ」

「マジで！」

「そんな驚くような事か？」

「好きな色とかあるでしょ？」

「好きっていうか……まああるかな」

「だったら、その色を使ってるシールドが欲しいとか思わない」

「いや……別に」

ペチン。と自分の額を叩く千佳。

「もうちょっとさ。見た目とかに個性を出そうよ」

「お前はどこの回し者だ」

「どこでもいいよ」

話にならないとお手上げの千佳。

妹の態度が微妙にムカつく。

「大体だな。色とかそんな事で強くなる訳無いだろう。そりゃ、気に入った色で強くなるなら俺も徹夜で並ぶけどそんな事は無いだろう」

「屁理屈って知ってる？」

それはお互い様だと思う。

が、言ってしまうと後が恐いので言わないでおく。

「で、お前は何処行くんだよ？」

話を変える為、琉奈にふる。

「ん？私はこれの調整に……」

肩からぶら下げているライフル。

「壊れたのか？」

「ちよつとがたついている気がするし」

「あ、そうだ。俺も買いに行かないと。壊れたから」

「何時？」

「昨日に決まってるんだろ」

「何だよ」

事情を説明。

「じゃ、今度見に行こう」

「いいよ、一人で行く」

「でも、あそこのショップはシールドはあんまり無いよ」

「マニアな武器使うなよ。兄い」

「うるさい」

「あはは」

俺達の会話を聞いて笑う琉奈。

「でも、琉奈さんバッテリーも買うんですか？」

「それは…予算と相談」

バッテリーとは武器のエネルギー、動力源の事だ。銃系なら弾の事だし、剣や槍ならビームの展開時間や強弱を調整するのに必要なエネルギーだ。俺のシールドは後者に属する。

これが無いと起動は出来無い。シールドは発射も出来ない。

琉奈はライフルを得意としている。

百発百中とはいかないが命中率はかなりのものだ。

「早く直した方がいいですよ。いざという時に壊れちゃったら大変な事になりますよ」

「何だよ。そのいざという時ってのは」

「昨日の犯人と闘う時」

「アホ。何で一般人の俺達があんな危険人物と関わらなきゃいけないんだ」

「それはそうだけど……」

俺達が関わらないでいようとしても、『死神』は何故か俺に興味をもっているらしいから嫌でも会う事になるだろう。

「でも、念の為って事もあるし」

「それもそうだけど。…闘わないのが一番良いだろう」

士官学校の生徒の言葉としてはどうかと思うが、避けられる闘いは避ける。これも兵法だ。

「そうだけど……」

俯く千佳。

「お前の気持ちは嬉しいけどお前が怪我でもしたらどうする？」
俯いたままの千佳の肩に手を置いて、

「帰って飯にしよう」

「……」

歩き出す千佳。

「じゃ、琉奈」

琉奈に声を掛けて癒えに帰る。

「おう」

手を上げて答える琉奈と別れる。

家に着くまで俺も千佳も喋らなかつた。

それは食事が終わった今も変わらない。

無言のまま食器を片付ける千佳。見る気は無いがテレビを点ける。

昨日の事がニュースになっている。

そして、どこかの識者があの男「死神」の行動について分析している。

「……合ってるのかな？」

食器を洗い終わった千佳が二人分のお茶を持ってきて隣に座る。テレビで喋っている識者の言葉を聞いている。

「……さあ」

そう答えたが、心の中では「違う」と明確に否定できる自分がある。

『死神』は愉快的な行動じゃないのは確かだ。

「あれ？昨日の事件で通行人に怪我人無し？」

「え」

千佳の声に思考を止めて画面を見る。

フリップには確かにそう書いてあった。

昨日の事を思いだす。

……

確か……「死神」が通行人の持っていた荷物を斬ってパニックになつて……

「無差別テロじゃ無いのは確かだ……て結果見れば誰でも解るよ」結果から推測する識者の言葉に笑う千佳。

テロとは違う気がする。警察施設を襲つたのは紛れも無い事実だし、そう言えない事は無いだろうが……

それから識者の意見を聞いていたが、まとめて見ると「よく解らない」と言う事だった。

「これでお金貰っちゃ駄目でしょ」

辛辣な千佳の批評。この批評があらゆる家庭で行われているのだから。

「で、兄い。警察での話は何だったの？」

「……知ってたの？」

驚いてお茶を噴出すような事はしない。

「玲斗君が言ってた」

アイツ……

口止めしていない俺も俺だが、口止めた所である男は聞かれなくても嬉嬉として喋るだろう。

「で」

逃げようとしたが、真剣な妹のから逃げられないと悟る。

「えっと……」

悪戯を見つけた子供が言い訳を考える様な心境で警察での事とその帰りに琉奈と一緒に「死神」と会った事を話す。

「……」
怒鳴られると思ったが妹は静かにお茶を飲んでいた。
その様子が恐怖を煽る。

千佳がコップをテーブルに置いただけで高まる鼓動。

「で」

「え、それだけ……だけど……」

声に感情が無い。

「警察に連絡したの？」

「まだ……」

「……」

手で「電話しろ」と示される。

黙って頷いて警察に掛け、さん呼び出してもらった。

「あ、どうも。詩月です」

「どうした？」

「えつとですね。さっき別れてすぐに『死神』と会ったんですよ」

「『死神』？」

「あ、『死神』って自分で名乗ったんですよ」

微妙に話が合わない。

「誰が？」

「昨日鎌を振り回していた男が」

これで理解できた　さん。

「自分で『死神』って名乗ったのか」

「はい」

「馬鹿にしているのか？あの男は」

「している様な、していない様な」

微妙な問題だな。

「さん。聞いていいですか？」

「何だ」

「『死神』の目的って何だと思えますか？」

受話器の向こうから聞こえるのは人が動く音だけ。

「…………さあな。俺には解らん」

数分の沈黙の後そう答えが返ってきた。

「それだけか？」

「あ…………はい」

「気をつけてくれよ。どうやら君は「死神」に魅入られたようだから」

「それ、さっき言われました」

「そうか？…………また何かあったら連絡してくれ」
電話を切る。

「…………」

「じゃ、私は風呂に入ろっかな」

電話の内容を聞こうと思うたが千佳は立ち上がって風呂へと向う。

「…………」

一人になると色々と考えてしまう。

頭に繰り返される一つの言葉、

『死神』に魅入られた。

琉奈と さんの声で繰り返し聞こえる。

その言葉から恐怖と共に興味を感じる。

『死神』が何を目的としているのか？

それを知るには『死神』に直接聞くのが一番速い。…………出来れば、
の話だが。

『死神』が俺に興味を持っているらしいのは間違いない。

近いうちにまた会う事になるだろう。

…会いたくて会いたく無いと言うのが俺の正直な気持ちだが…………

兄妹

赤く染まった街をあてもなくブラブラと歩いている。
それほど多く無い人。

ま、昨日の事が原因なのは間違いないだろう。

……その一因、というかほとんどが僕のやった事だけだ。

それでも、人は恐怖を感じながらも生きている。今日、自分が巻き込まれない事を信じて。

「……ん」

少し前を見覚えのある格好の男が通る。

距離をとり観察する。

どうやら彼女と一緒にいる。

何かを話しているが、内容は解らない。

多分、昨日の事がその後の警察での事だろう。

……クス。

自分のやっているこのばかげた行為に笑ってしまふ。

どうやら、僕は彼に対して興味がある様だ。

それは間違いない。じゃなければ名前を聞かなかっただろう。

彼の何処に興味があるのか？

咄嗟の判断？

追い詰められてからの冷静な眼？

一瞬の遅れが死を招くと理解しながらの行動？

考えても結論は出ない。

自分の事なのにさっぱり解らない。

さて……どうしたものか

いつまでも後をつけていてもしょうがない。

しかし、彼と彼女の話に割って入るのも躊躇う。

うーむ……

しかし、彼とは何時会えるか解らないし……

「あれ？」

ふと、辺りを見渡せば僕と彼等以外の人がない。
このままついていけば妙な誤解を生むな……
意を決して声を掛ける。

「やあ」

振り向いた瞬間、彼の顔に緊張が走るのが解る。
少し下がり、彼女を守る様に立つ。

「誰、なの……」

震える彼女の声。

「そちらは……始めまして。僕は……そうですね。

『死神』とでも言っておきましょうか」

僕の名前としてはこれ以上ない程びったりだと思っ

「……何の用ですか？」

殺気立つ彼。

まいったな……僕にはそんな気は無いんだけど。

「別に、見かけたから声を掛けただけです。ほら。何も持って無いでしょ」

両手をブラブラと振って闘う気が無い事をアピールする。

それでも彼の警戒は緩まない。

例え彼が向ってきて僕には敵わない事位解っているだろう。今、彼の頭の中は、どうやってこの場を切り抜けるか。あらゆるコミュニケーションをしているだろう。

「ふー。そんな殺気だたれては話も出来ませんね。では。また」

それだけ言っこの場を立ち去る。

……立ち去ってから、自分の性格が意外に悪かった事に気付いて苦笑する。

でもこれで彼も僕に興味を持つだろう。

次に会う時はどうなっているかな……

「起きろー」

……
ドンドンと部屋のドアを叩かれる音で眼が覚める。
モゾモゾとベッドの中で蠢いて時計を確認する。

「……六時前じゃないか……」
いつもより一時間早い。

「おーきーるー」

ドアの外で騒いでいる妹。

「入るよー」

当たり前のように部屋に入ってくる元気良すぎる位に元気な千佳。

「ほら、起きろ」

俺が包まっていた布団を引き剥がす。

「……」

ジト目で千佳を見るが俺の視線を気にもせず、

「さ、行くよ」

等と意味の解らない事を言っている。

「……何処へ？」

時間は午前六時前。

開いているのはコンビニ位だろう。

寝ぼけた頭でそう推理し、

「飯無いのか？ だったら俺はおにぎりが……」

「何でご飯あるよ」

「……」

見下ろす千佳と半眼で見上げる俺。

じゃ、何？

「いいから。起きろ」

パアアン、と頬を叩かれて眼が覚める。

「起きた？ じゃ、着替えて」

ノロノロとベッドから降りて制服を取り出す。

「ジャージ」

千佳の声に制服からジャージに持ち返る。

「……」

「……」

「ジャージを持って着替えようとするが…」

「何？」

「千佳が部屋から出て行こうとしない。」

「着替えるんだけど」

「解ってるよ。早く着替えて」

「ドアの前に仁王立ちしながら出て行こうと言っ気が無いらしい。」

……

「ま、いつか。」

「着替えている間も「早く」と急かす千佳。」

「じゃ、行こう」

「着替え終わった俺の手を引いて外へ出る。」

「夜明けの凜とした空気に身と気が引き締まる。」

「じゃ、ランニングに行こう」

「そう言っ走り出す千佳。」

「…何で？」

「寝ぼけた目で千佳を見る俺。」

「……おい！何してんの！」

「ついて来ない俺に気付いて戻ってくる。」

「ほら。兄いの為にやるんだから」

「はあ？」

「意味解らん。」

「この寒い中走る事が何で俺の為になるんだ？」

「兄いは『死神』と闘うんだから。ちよつとは鍛えないと」

……

「寝ぼけた思考が一気に目覚める。」

「ちよつと待て。何時俺が闘う事になったんだ？」

「似た様なモンでしょ。ほら、早くしないとご飯食べる時間無くなるよ」

どれ位の距離を走るつもりなのかかなりのスピードで走っていく。

「おい、ちよっと待ってって……」

ストレッチもしないまま走り出す。

「ハア……ハア……」

息も絶え絶えに家に辿り着く。

朝っぱらから何キロ走ったのか？

「フウ……最初にしてはキツかった？」

「……」

沈黙はイエスと判断された。

「じゃ、明日からはもうちよっと短くする」

そうしてくれ……

「お待ちかねのご飯までに息整えておいてね」

「……」

俺とは違いもう息が整っている。

千佳の凄さを改めて思い知った。

「どうしたの……？ 何か疲れて無い？」

登校中、琉奈が俺の顔を見るなりそう声を掛ける。

「朝からマラソン」

そう答えるのが俺の限界だ。

「何で？」

答えずに千佳に眼を向ける。

「千佳ちゃん？」

「兄いはこれから闘わなきゃいけない運命ですから。ちよっとでも鍛えないと」

両手をグッと握る、頼もしい妹。

自分が闘えないからその代りに、とか考えているのだろうか？

……有り得るのが嫌だ。

「ま、そうなった時は私も闘いますけどね」

もう、コイツには何を言っても無駄の様だ。

「…………お前が怪我したら笑ってやるからな」

「そのまんま返すよ」

「ふふ…………」

何が嬉しいのか笑う琉奈。

「兄い、帰ってからも特訓だからね」

「マジで？俺今日はちょっと…………」

「何よ。今日から始めたのにもう辞めるの」

「そうじゃなくて、帰りに店に寄ろうかと思って」

「何か買うの？」

「新しいシールドを見て行こうと思って」

「じゃ、付き合おう」

「いいよ。一人で」

ふっふーん。と妙な笑い方をする千佳。

「お金…………あるの？」

「いや…………見に行くだけだから」

「気に入ったのがあれば買って上げるよ」

「え、いいよ。自分で買おうし」

「いいから、いいから。妹に任せなさい」

「いや…………その言葉の使い方微妙に違って無いか？あ、そんな事じゃなくて」

「じゃ、校門で待つ様に」

それだけ伝えて戻っていく千佳。

取り残される俺と琉奈。

「相変わらず…………マイペースと言うか…………」

「そんな可愛いモンじゃないよ。アレは。強引と言ったほうがしっくりくる」

「あは…………」

人気の無い屋上に琉奈の笑いが響く。

放課後。

校門には嬉嬉とした雰囲気が遠くからでも解る千佳が立っていた。何がそんなに嬉しいんだ？選ぶのがそんなに楽しいのか？

俺には理解できない感情を持っている千佳に声を掛ける。

「じゃ、行こう」

「いちいち声に出すな。恥ずかしい」

近くを通る生徒が千佳の声を聞いてこっちを見る。その中には知っている顔がちらほら見えた。

「今日は千佳ちゃんと一緒か？」

「うるさいぞ」

騒ぎのある所この男あり。

当然と言つかやっぱりと言つか、玲斗がいた。

「何処行くの？」

「何処でもいいだろ」

「面白いトコなら俺も行く」

「来なくていい」

タイミング良くケータイが鳴る。

「くそ……こんな面白そうな時に一体……」

悪態を吐きながら着信を確認すると、

「……じゃ、俺はここで」

電話に出ながら俺たちとは反対方向へと歩いて行く。

一体誰かは知らないが、いつもいつもタイミング良く掛けてくれる。ありがたい事だ

「じゃ、張り切って行こー」

中心街に向って歩き出していく。

「狭っ！」

開口一番。千佳の叫び。

「これでも揃ってる方だぞ」

やってきた俺がよく来る大手の武器店。

剣や槍、銃等はかなりのスペースが取られているが、俺が見に来たシールドは扱いづらい為人気が無い。俺も学校でシールドを使っている奴は見た事が無い。

アレ？ ……と、いう事は……

「学校でコレ使ってるの兄だけじゃ無いの？」

俺と同じ事を考えていた。

「……かもしれない」

元は守る為の物を攻撃的にした物。

そんな物が扱いやすい訳が無い。

「でも、よく言うだろ「攻撃は最大の防御」って。それをコンセプトにした結果こうなったんじゃないの？」

「うーん……そうかも知れないけど。だから、遠距離なのか近距離なのか。どっちを稽古すれば良いか解らないから誰もやらないんじゃないの？」

「……」

否定できない。

「多分「メイシティ」でコレ買うのって兄だけじゃ無いの？」

「……そんな事は無い。と、思う」

「まあ、いたとしても……三人位……かな」

「……微妙だな」

多いような、少ないような。

「利用者が少ない割りに……高い」

今度は値段にケチをつけ始める。

「こんなモンじゃないの？」

「いや〜」

数少ないシールドを手に取り比べている。

「お。コレ限定」

手に取っているのは、

「「アタッカー」か」

「これにしなよ。値段もお手頃だし」

そつちが本音だろ。

だが、資金を出して貰う以上何も言え無い。

「うーん……でもな……ビーム稼働時間が前のとあんまり変わらな
いし……」

「じゃ、駄目」

元の位置に置く。

「どれ位？今の」

「十分位」

「短つ。バッテリー弱ってるんじゃないの」

「そんな事無いよ。「シールド」は「ワイヤーフレーム」と「シールドフレーム」両方でビーム使うからそれ位なの」

「燃費悪っ！ 何で使うの？ 止めてしまえ！」

世のシールド制作者及び使用者を敵に回しかねない一言。

「じゃ……コレは？ 兄いの字も入ってるし」

指差したのは「最大出力連続稼働時間三十分」
中々燃費がいい。

『リ・エイト社限定モデル「霽月」レプリカ』

「霽月」も神話時代に使われたとされる武器の名前だ。

『空を纏うもの』と呼ばれる気象を司る神様の従者『ヴィナ』の
使っていた武器がこれだと言われている。

「今までの三倍だよ」

「値段も三倍だな」

「じゃ、コレは無し」

胸の前で「バツ」を作って次の品定めをしようと見た瞬間、

「以上で終わります」

「まだあるだろ」

千佳の終了宣言を認めず、千佳の後を指差す。
と言っても、二種類だけ。

「こっちからは予算の都合上……」

百パーセント申し訳ないと思っていない笑顔。

「……………」

ウチの金庫番が俺の意見を無視する。

「じゃ、これからスーパールのタイムサービスが始まるので」

「まだ早いだろ」

「いやいや。移動時間を考えれば……………」

「ちよつと待てて……………」

「何？予算オーバーしてるから……………」

胸の前でバツ印。

「俺も出すから……………」

「武器にこだわりは無いつて言つてたじゃん」

「こだわりを持って言つたのはお前だろ」

「しまった……………余計な事言わなきゃ良かった」

「俺も出すから」

「当然でしょ！こんな高いんだから。それと、いくつか条件付けるから」

「解った」

千佳の気が変わらないうちにお金を下ろしに行く。

まるで玩具をねだる子供の様だが気にしない。

どうにか千佳を説き伏せて「霽月」を購入する事に。

「じゃ『携帯許可証』ありますか？」

「あ、はい」

店員さんに言われて、財布から『武器携帯許可証』を出して店員さんに見せる。

「じゃ、確認を取りますので……………」

店のパソコンで確認を取っている。

『武器携帯許可証』とはその名の通り『武器』を『携帯』するのに必要な『許可証』の事だ。

俺達の通う『士官学校』では入学と同時に取る事になっている。

「確認取れましたので、お返しします。十八万八千八百円です」

さっき下ろしてきた俺の個人的な預金から十万を出す。後は家の

財政から出す事になった。

「おい。九万出せよ。後ろつかえてるだろ」

「何？ その言い方？ あれ〜。財布何処やったかな？」
白々しい動きで財布を探す。

「おい。わざとらしい過ぎるぞ。早く。すみません」
後ろで待っているお客さんに謝る。

「あれ〜。おかしいな〜」

「ゴメン。俺が悪かった。出してください」

「その態度が大事だよ。詩月君」

「ここで言い返すと同じ事の繰り返しだという事は今までの経験上よく解っている。

店員さんや他のお客さんに笑われている。

「ありがとうございます〜」

品物を受け取り店を出る。

覚えられたな。確実に。当分ここには来づらい雰囲気は漂う事だろう。

千佳の後を追いかけて外に出る。

来た時より少し人が増えている通りを並んで歩く。

「このまま行く？」

「一旦帰ってから」

千佳と二人、下らない話をしながら帰って行く。

今日は無事にスーパーでの買い物を終了。

「じゃ、兄いはいこれやって」

手渡された一枚の紙。

「マジで」

「そ、夕食をおいしく食べる為のメニュー」

何か変な言い回し。

だが、それを流して先へ進む妹。

「簡単でしょ」

「……」

何とも言え無い。

「じゃ、作ってる間にやっとして」

どうやらというか……、やはりというか……

俺に拒否権は無いらしい。そんな事はシールドを買った時に解っていた事だが……。

なにやら鼻歌を歌いながら料理を始める妹。

それを聞きながら俺は筋トレを開始。

客観的に見ると、この光景はどう見えるのだろうか……

……考えると、テンションが急降下してしまう。

「お粗末様！」

相変わらず力が入っている千佳。

「風呂……入る」

「あ、ちよつと待って」

「……何？」

まだこれ以上何かあるの？

「これから外言って模擬戦」

「模擬戦？誰と」

「……」

微笑みながら自分を指差す千佳。

「これから……？」

「イエス。だから洗い終わるまでちよつと待って」

いつの間にか千佳は『燎原ノ焰』を持ってきていた。

「……それで」

「そ。お互い慣れとかないと」

千佳は本気で『死神』闘う気である。

「楽しみだな」

何が嬉しいのか満面の笑み。

その顔から逃げ様が無い。

千佳は鼻歌を歌いながら洗い物を進めて行く。

何故こんな事になったのか……

これも『死神の呪い』の為せる事か……。

夜、準備を整えて近くの公園へ、

「ここなら大丈夫でしょ。警察も遠いし」

「音が……」

「大丈夫だって。もし警察に通報されたらダッシュで逃げれば。さ、始めるよ」

ベンチに救急箱を置いて剣を構える。

何でこんな強気な妹になったんだ？

ちっちゃい頃は優しくお淑やかだったのに。

「何してるの？構えて」

十年位前の記憶に行っていた意識が千佳の声で現実に戻される。

左手にシールドを装着し、

「じゃ、行くよ。ビームは無しね」

『燎原ノ焰』を構え、一気に間合いを詰める。

「おい、ちよつと……」

「喋ってる暇なんて無いでしょ」

「え？」

流れる様な剣閃。それを避けて左手を構え、

キーン……左手に衝撃が走る。そのまま睨み合う。

「流石、兄い」

「うるさい」

「じゃ、次行くよ」

ドン、と蹴られ後ろに飛ばされる。また、向ってくる千佳。正面。

迎撃体勢を取る。

シールドを嵌めた左で向ってくる千佳にカウンターを狙う。

流石に顔は……マズイよな……

「何？油断してんの」

「は」

俺の左ストレートを難なく避け、

「甘いね」

直撃する剣。

「ぐはっ……」

その衝撃に膝をつく。

「ほら、立って」

「ちよつと……モロに……」

息が出来ない。

「油断してるからでしょ」

四つん這いになり呼吸を整える。

「錬武の優勝者が情けない事言わない。ほらほら。早く」

コイツが俺と同じ男子の部に出ていれば優勝者はコイツだっただろう。

千佳が剣を習い始めてから、何故か一度も勝って無い。

戦闘に関する全てにおいて天才。と言われている千佳。剣術部からは「全国制覇を狙える」と言われているらしい。

「お前……もうちよつと」

「手加減ならしないよ」

「何で……怪我でもしたら……」

「それじゃトレーニングになら無いでしょ」

指先をクイクイと動かしている。

「こんな事やる意味があるのか？」

少し息が整う。

「さあ？それは兄い次第じゃ無いの？」

「何だよ……それ」

「だって、兄いは警察でも敵わない『死神』に魅入られたんだから」
「だから……こんな事やる……」

意味無いだろう、と言いかけて、

「うーん……今、私に出来るのはこれしか無いから
言葉を止める。」

「……」

「そりゃ、私は警察より弱いかもしれないけど、兄いに怪我とかし
て欲しく無いっていう気持ちは私の方が強いよ」

「……」

「だから、ちょっとは力になりたいの」

少し震えた声でこう言われたら兄として何も言え無い。

「だから、ほら立って」

「まったく……」

深く息を吐いてゆっくりと立ち上がる。

「じゃ、これからは手加減無しで」

「当然」

千佳に解らない様に息を吐く。

「じゃ……」

「いつでも」

お互いに構えて、

「ハッ！」

今度は俺から仕掛ける。千佳は動かずに迎え撃つ。シールドで剣を
押さえたまま、パンチを出すが一瞬の迷いが、

……顔に当たったら……

「何考えてんの？狙いと……腹が甘い」

避けられた瞬間に腹に衝撃が走る。

また膝をつく。

「攻撃が正直だし、稽古中に余計な事を考えない」

「……偉そうに……」

「錬武優勝者の名が泣くよ」

「そんなの意味無いだろう」

「そう？立派だと思うけど。早く立って」

「……よし」

立ち上がり距離を取る。

「どうぞ」

くそ……完全にナメられてる。

さっきのは正直すぎた。今度は…、

「行くぞ」

「言わなくていいから」

再び構える。

間合いを詰めつつワイヤーを発射。前に使っていたシールドより腕に負担が掛からないのにスピードは上がっている。

「おおっ」

剣で弾く千佳、その隙を狙い間合いに入った瞬間に右ストレート。

もう、迷いは無い。

本気で当てる。

「その調子」

身を沈めて避けられる。

「お腹がら空き」

俺のがら空きの腹部を容赦なく狙う。

予測通り。ワイヤーを巻き戻すスピードも違い過ぎる。俺の予測を上回るスピード。危ないかな、と思ったがこのまま行く事にする。

兄の威厳の為に。

千佳の後頭部を狙うのが本命。引っかかったと、ほくそ笑む。

「……ん？」

俺の顔を見て突きを止めて、体を反転させ、

「こっちが本命か」

バレた！

死角の左に避ける千佳。それを追いかけて、俺も左にワイヤーを振って体勢を整える時間を稼ぐ。

「お。いいね」

ステップを踏む様に追撃を避ける。ワイヤーが限界まで伸びたので

自動で巻き戻る。

さっきと変わらない距離で妹が笑っている。

「今のは良かったんだけど…笑っちゃ駄目だよ」

「俺は正直なんだ」

「ポーカーフェイスの稽古ってどうやるんだろ？」

剣を持ったまま腕を組んで考える。

「……………」

これは誘ってるのか…………それとも…………

「うーん」

どっちだ…………

首を回したり、空を見上げたりしている妹。

「ま、終わってから考えよう」

千佳が構え直した瞬間、

反射的にシールドを前にする。金属音が響く。その先で、

「ほら、反応が遅い」

千佳が微笑んでいた。

「お前が…………速いんだろっ」

「えゝ。そんな事無いよ」

じりじりと剣に力が込められる。

流石に力で負けるわけには…………

「足元注意」

声と共に妹の姿が消える。

「うわっ！」

気付いた時には遅かった。

星空をバツクに俺の脚が見えた…………

「兄いがこんな……………」

嬉しそうな千佳の声。

「何だよ。続きを言え」

「でも、新しいシールドにちょっとは慣れた？」

「発射と巻き戻るスピードが全然違う」

頭を強かに打ったので、「これ以上は無理」と言わなくても伝わり、千佳もそれを了承。今は二人ベンチに座り休んでいる。

「明日もやる？」

「当然」

このままでは兄の威厳が……、そんなモノ無いかも知れないが……

「じゃ、今日は帰って、明日の朝六時起床だから早く寝ろよ」

「…了解」

もう……何がどうなっただろうなっただのか……

誰か教えてくれ……頼む。

死神対騎士

あれから一週間。特に何もなく時間が流れていった。

「じゃ、今日は休養と言う事で」

校門前でそう言われたので今日はゆっくりと羽根を伸ばそうとしていたのに、俺は今、

「何故ここにいる？」

「まだ言ってるのか？ほら、これ読めよ」

持っていた本を渡してくる玲斗。

帰りに玲斗に捕まったのが運の尽き。

いつも通り大手の古本屋で立ち読みを精を出す。

「……」

手渡された漫画を読む。

「あのさ……帰りたいんだけど」

「たまには男同士も良いモノだろう」

「ここじゃなくてもいいだろ。立ち読みも意外と疲れるし」

「……流石だな」

買うつもりなのか何冊かを脇に抱えて、本を呼んでいた目が驚きの目に変わりこっちを見る。

「何だその目は」

「詩月。流石だ。後ろの棚を見ている客と背中が触れ合うこの決して広く無い通路。

それを理解した上で座り読みに挑戦するとは」

「怒られるぞ。つーか、何で座り読みなんかするんだよ」

「お前が言っただんじやないか。立ち読みは疲れるって」

「だからと言って座って読む訳無いだろう」

「立っているのが嫌なら座るのが普通の人の考えだろう」

「時と場所を考えるのも普通の人の考えだろう」

「お前から一般人の定義を言われるとは思わなかった」
「お前に驚かれた事が俺には心外だ」
「いやいやそんな事は無いぞ」
ざわついた店内でもその言葉ははっきりと聞こえた。
「俺はお前が思っているより常識がある」
「言ってる」

視線を漫画に移す。

「面白いだろ？」

「まだ、読んでないから」

「これから面白くなるから」

「呼んだ事あるの？」

「あるよ。立ち読みだけど」

ふと、目を上げてこれの続きを探す。

「……全部？」

「当然だろ」

ホントに？全部で三十巻あるんですけど。

「嘘だよ。これは集めたんだ」

いや……コイツなら充分ありえる。

「ホンマに買ったんやって」

「いや……疑ってる訳じゃ無いよ」

「その目は何や。疑ってる目やぞ」

思わず目を逸らしてしまう。

「ほら！ 目え逸らした！ やましい証拠や！」

「偶然だって」

「どんな偶然で目え逸らすんや」

「だから、偶然……」

後の女の人がクスクス笑っている。

「お前がうるさいから他のお客さんの迷惑になるんやろーが」

「はいはい。俺が悪かった」

「気持ちが入って無い」

「コーヒー奢る」

「それで買収できると思うなよ」

「いらなの？」

「誰もいらん、とは言つてない」

「じゃ、いいだろ」

「……コーヒーだけ？」

「何？たかり？お前がそんな奴だとは思わなかった」

「いや……詩月君。そこまで言う事は無いと思うけどな。僕は」

「名前言うな」

「俺は別にコーヒーはそんなに飲みたく無いよ。でもな、物で人を宥めるちゅーのはどうかと……」

「じゃ、ううっん……あーあー」

喉を調整して、

「俺が悪かった。許して欲しい」

「こつち見て言え」

「これでいいだろ」

「コーヒー忘れんなよ」

「やっぱり欲しいんじゃないか」

「コーヒーに釣られた訳って事は無いぞ。俺はお前の謝罪を受け入れた上で、お前の誠意を無駄にしないように」

「解ったから。ちょっと黙れ」

「黙れつて何だよ」

「また？」

結局、コーヒーとサンドイッチを奢る事で和解が成立した。

「お。馬鹿が二人で何してるの」

古本屋から出た直後、琉奈と会った。

最初の言葉がこれだ。

「もつと言い方つてのがあるだろう」

「しょうが無いじゃない。事実なんだから」

「しょうが無いつて」

「ツッコむトコ違つぞ。玲斗」

「……立ち読み？」

古本屋の店内を覗きこんで俺達の行動を推測する。

「いや」

当たっているのに否定。

「買い物」

「何買ったの？」

買って無いのに？

「……言え無いよ……なあ」

「何で俺に聞く」

「そりゃ……お前」

鞆を後ろに隠して妙に恥ずかしがる玲斗。

「え……何……買ったの？アンタ達」

玲斗の悪意のある悪戯に見事に引つかかる琉奈。

「何も買って無いよ」

「女には……見せられ無いよ」

煽る馬鹿。いや、玲斗。

「何言ってるの？お前」

「ちょ、ちよつと鞆見せて」

玲斗の鞆を取ろうとする。

「ば、やめろ。こんなトコで」

琉奈の手から鞆を守ろうと必死だ。

大した物は入って無いのに。

「お前何言ってるの？何も買って無いだろ」

「ホントに？」

「詩月……あんなに真剣な顔で選んでたのに」

「詩月？」

「何？」

俺の問いに手を出すと言う動作で答える琉奈。

「琉奈、ここじゃ……」

琉奈をからかう事に喜びを感じている玲斗。

「解った。裏に行こう」

否応なく店の裏へと連行される。

何故そこまでこだわることか解らない琉奈の赤い顔と、そんな琉奈の顔を嬉しそうに見ている玲斗。嬉しいのは自分の思う通りに動いてくれる琉奈のリアクションなのは間違いない。

「ここならいいでしょ。ほら」

睨んでいる琉奈。

ここまで怒るような事をした覚えは俺には無い。あるとすれば、俺の横で嬉しそうに笑っている男。

「女に見せられる訳無いだろう。なあ」

「俺に聞くな」

「ホントに。千佳ちゃん泣くよ」

「何で千佳が出て来るんだよ」

「そうだぞ。千佳ちゃんは無関係無いだろ。なあ」

一歩も引き下がらない琉奈。玲斗がこつち見る。そんな琉奈の様子が楽しくて堪らないといった感じの玲斗の口元。

「ほら！」

だんだん声に怒りが混じる。

それすらも、楽しいと言わんばかりの隣にいる馬鹿。

「しつこいな。お前も」

まだ挑発する。声が笑ってる。

「いいから！早く！」

琉奈の目に炎が見えそうだ。

「琉奈ちゃんの可愛い顔が恐くなってるよ」

楽しくてしょうがないんだろうなあ…玲斗。

手を引く琉奈。

「…?」

意外な行動だったのか、玲斗も驚いている。

「！」

泣いてる！琉奈から聞こえるすすり泣く声に慌てる俺。

「……………どうすんだよ！」

小声のつもりだが、多分琉奈にも聞こえてる。

「どどど、どうするってお前……………どうするよ？」

流石に予想外の事なのか完全にパニックだ。

「……………っ……………っ」

手で顔を覆って泣いている琉奈の前で慌てる男二人。

「わ、悪かったよ。琉奈」

俺は何も悪く無いがとりあえず謝る。

「……………っ……………ぐすっ」

「ゴメン。琉奈」

頭を掻きながら謝る玲斗。

「……………ぐす……………っ」

チラツと顔を上げて、

「鞆見せて……………っ」

顔を伏せたまま、片手だけ突き出す。

玲斗と顔を見合わせる。

「解ったよ」

玲斗から鞆を渡す。

「…詩月も」

俺も鞆を渡す。

受け取った瞬間、満面の笑みを浮かべる琉奈。

「じゃ、確認しまーす」

「嘘泣き？」

「え、何？」

琉奈の嘘泣きに混乱し、事態が飲み込めない玲斗。

「へへへ。引つかかったあんた等が悪い」

さっと鞆を開けひっくり返す。ばさばさと落ちる教科書やら筆箱

やら弁当箱。

「何だ。玲斗の方は何も無いじゃん。じゃ、次」

「おいっ！ もっと丁寧に扱え！」

ポイツと投げられた玲斗の鞆。俺の方も玲斗と同じ様にひっくり返される。中の物は玲斗と変わらない。

「こつちも無いじゃん」

俺の鞆も。ポイツと投げ捨てる。

「おい！」

「何？ あんた等が変な事を言うから悪いんでしょ」

「何も言つて無いよ。お前が勝手に勘違いしたんやろーが」

「何か……女には見せられないとか……言え無いか」

言っている内に顔が赤くなっていく。

「少年漫画やぞ。見せられんやろ。フツー」

意味の解らない事を言い出す玲斗。

「え？それだけ」

「そーや」

「少年漫画位、女の子でも読むでしょーが
もつともだ。」

「お前が勝手に何か考えたんやろーが。何考えた。言え」

お前の目的は何だ？それを言つて欲しい。

「それは……」

「何や？言つてみ」

「何言わせたいんだ？ お前は」

「詩月は黙ってる。ほら、琉奈」

嘘泣きに対する仕返しなのか、引つかかったしまった自分を誤魔化すためののかは解らないが、確かな事は一つ。

嬉しそうだ。玲斗。

「え……だから……それはあ……そのお」

「もういいぞ。琉奈。ほら玲斗。行こう」

「もうちょっとやつて。詩月」

「何がだよ。ほら。コーヒー奢るって言つたら」

「お、そうやったな」

「じゃな、琉奈」

玲斗の腕を引っ張って行く。

「ちよつと待て」

赤い顔のまま、

「私の分は？」

「……解つたよ」

腕を引っ張られたまま、まだ琉奈をからかおうとする玲斗。

「来るんやったら、俺が買った本を何と間違えたか」

「詩月、鞆持つて。まだ言うか？ この口か？ この口か！」

俺に鞆を押し付けて、玲斗の頬を、ぎゅぐゅと抓る琉奈。

「痛たたたたたつ」

「何？ 聞こえ無い」

徐々に腕を回していく。玲斗の悲鳴にこつちを見る人達。俺は何

も関係ないと言いたかったが、

「詩月！ 手離せ！」

と、名前を大声で叫ばれた。

「美味かったな」

満腹になってゴキゲンの玲斗。

「詩月があんな美味しいお店知ってるのが意外」

「よく行く」

「千佳ちゃんか？」

「やんな」

「おい。妙な関心の仕方をするな」

「え、千佳ちゃんに聞いたんじゃ無いの」

「その言い方だと決定だな」

「そうでしょ」

「まあ……そうだけど」

「やっぱり」

「何か悔しいのは何故だ？」

夕暮れの帰り道。そんな事を喋りながら三人で歩いている。

「じゃ、俺はこっちに用あるから」

交差点で玲斗が立ち止まる。

「おう」

「詩月」

先程までのおどけた様子は消えていた。

「あ、そうだ。俺に出来る事があるなら言ってくれ。いつでも力になるから」

「……ドラマとか漫画みたいな台詞だな」

「でも、本気」

「……ありがと。その時は」

「じゃな」

走っていく玲斗の足音が遠ざかる。

「……何か気付いてるのかな？」

「……」

そういえば、玲斗は さんの事に気付いていた。でも、今日は何度もその事に触れなかった。偶然なのか？ それとも、気を使ってくれたのかは解らない。

ドラマや漫画の世界じゃよくある台詞。実際に言われるとは思わなかった。

…思ったよりジーンと来ている。

「ん？ 泣いた？」

「泣いて無いよ」

下から覗きこんでいる琉奈から顔を逸らす。

「泣いてるよー。大丈夫。誰にも言わないから」

「だから、泣いて無いって」

「いいよ。気にしないで。思う存分泣きなさい」

「だから」

嬉しそうに笑う琉奈。

「さあ、私の胸で泣きなさい」
パツと腕を広げている。

「泣いて無いから。俺は」
琉奈の横を通り抜ける。

「も〜。恥かしがり屋さん」

「お前、馬鹿にしてるだろ」

「あ、私こつち。じゃね」

俺の家の前で琉奈と別れる。

まったく、明日覚えてるよ。明日どうやって報復するかを一晩考えよう。

窓の外に気配を感じる。

ベッドから起き出し真つ暗な部屋の中、そつと窓を確認。

流石に姿は見せない。が、殺気が伝わってくる。見えないが居るのは確かだ。

その内の一人はあの「騎士」だろう。

「その他は……」

あの『騎士』より弱いなら問題は無い。

「頭を叩いて……」

その隙に逃げよう。

立て掛けてあった鎌を手に取り、申し訳無さそうに取り付いている玄関の扉。その横に僕も気配を消して潜む。

……足音が聞こえる。

微妙にずれて聞こえる足音。音の数から、二人と判断。

僕が背を預けている壁に一人。扉を挟んでもう一人が突入体勢を取るのが解る。

向こうは僕の事に気付いているのだろうか。

心が研ぎ澄まされる。相手の息使いが聞こえて来そうなほどの静寂。……二人目が突入した直後を狙う。その後はあの『騎士』を叩いて逃げる。何度も頭の中でシュミレーションする。あらゆる状況を想

定し、その全てにおいてもっとも安全な選択を選ぶ。

問題は『騎士』に勝てるか？　と言う事。

この前の戦闘から判断すると、僕と同等かそれ以上の力を持っている。

彼との戦闘をシュミレーション。

……あらゆるパターンに置いて、確実に勝てる。と言う保証は無いという結論しか出てこない。

僕にはやる事があるからここで無理をする気は無いし、捕まる気も殺される気はもっと無い。

僕のシュミレーションが終わった直後、扉が吹き飛ぶ。

その音で思考を現実に戻す。

一人目が突入。それをやり過ごして、二人目の体が見えた直後、鎌を振り上げる。

僕の殺気を本能的に危険を察知して止まろうとするが間に合わない。

腕が飛び蹲る男。その音を聞いて後ろを振り返る男と目が合う。

「やあ。今晚は」

「え」
暗い室内の唯一の灯りであるビーム。その灯りが照らすのは、

驚いたままの男に鎌を振り下ろす。

キーン……と暗い室内に響く。

「流石、と言った所かな」

「貴様」

思った通りあの『騎士』よりは弱い。

となると、本命の『騎士』は何処に？

「良くやった！」

「後か！」

睨みあっていた男を突き飛ばし、体を反転させて薙ぎ払う。

一度、金属音が響く。

「チッ」

舌打ちと共に次々と繰り出される鋭く重い剣。

後の男も体勢を立て直し、『騎士』と連携する。

「これは……」

喋る余裕も無い。

「大人しく……」

僕も同じ事を言いたいが、間違いなくその後の言葉が違う。僕はしてくれれば何もしないし、彼等は捕まって欲しい筈だ。

僕の考えなど解る筈も無く剣戟が響く。

このままではこっちが先に力尽きてしまう。その前に何か反撃し無いと……

「……ちっ」

今度は僕が舌打ちする。

攻め手が見つからない程、流れる様に剣が舞う。

ジリジリと追い詰められて、もう後に下がれない。後から加わった男の剣が僕の鎌の動きを止める。その隙を突いて、

「これまで……」

大きく振りかぶる『騎士』。思いつき振り下ろされる。

「ハア！」

男を突き飛ばす。そのまま男に追い打ちを掛ける。

僕のいた場所に振り降りされる剣。

壁に真っ直ぐ大きな直線が床まで続く。

「ぐ……」

剣が床につくのと同時に男が悲鳴を上げ倒れる。僕が突き飛ばした男は崩れた体勢のまま剣を振るい僕を牽制するが、僕はしゃがんでそれを避けて男の足を斬った。

「残るは……」

そう思った瞬間、

ガシャアアン。

ガラスが弾け飛ぶ。

「くっ」

体を屈めて窓から離れる。

「貰った！」

壁を背にした瞬間、『騎士』が突進してくる。

それを避け体勢を崩しながら反撃。

難なく剣で止められる。僕の動きが止まる。

その瞬間、割れた窓から弾丸が飛び込んでくる。どこから狙っているのかは解らないが、半端じゃない腕だ。僕の足元数センチの所に着弾。『騎士』から離れて壁際に非難する。

「やれやれ」

大袈裟にため息を吐き、

「流石は『騎士』だね」

「当然だ。これ位出来なくてどうする？」

「国を守る為に？ それとも王や貴族かな？」

「両方だ。それと市民も入る」

「ふうん」

彼は迷う事無く答える。

「貴様の目的は何だ？」

僕を誘うように窓際に立つ。

「僕の目的？」

「そつだ。貴様は騒ぎが目的では無いだろう」

騒ぎなんかどうでもいい。

「それは……僕に勝つ事が出来たら教える、と言う事で」

「なら、すぐに教えて貰おう！」

逃げ場の無い壁際。先程と同じ様に剣戟が響く。

いや、少し違う。明らかに誘っている『騎士』の攻撃。

つまり窓を背にする場所。

「もう、大人しくしろ」

「嫌ですよ。僕にはやらなければならぬ事がありますから」

「なら、力づくでっ！」

「それも無理です」

薙ぎ払われる剣を、ひらり、と飛んで避ける。

「な……！」

この動きは予測していなかったのか、
『騎士』の動きが止まる。驚く『騎士』、僕は天井を蹴り、その反動で『騎士』を飛び越えて、窓際に着地し、狙撃される前に玄関付近の壁に転がっていく。僕の居る場所は狭い。ここでは振る事など不可能だ。したがって僕のとる体勢は鎌を真つ直ぐに相手に向ける事。後は隙を突いてこの部屋から脱出するしか無い。相手の先を読む。この場合彼ならどう動く？……一つの可能性が浮かぶ。その対処を考え、思いつく。ぼくの方針は決まった。ビームを切った後はチャンスを作るだけだ。

流星は『騎士』だ。驚いたのは正に一瞬。すぐに追撃してくる。真つ直ぐな攻撃。リーチではこつちが有利だ。そんな事は解っている筈なのに迷う事無く向ってくる。

「いい加減にっ！」

大人しくすると思うのが間違いだと気付いて欲しい。

剣で鎌を弾く、明らかに『騎士』の間合いの外。

「大人しくっ！」

鎌を弾いた勢いのまま体を反転させ、

「捕まれえ！」

更に踏み込んで剣が突き出される！

それしか無い。僕の予測通りの攻撃。

僕に向って真つ直ぐに突き出される剣。

僕は彼の目の前でビームを起動する。

真つ暗な室内で間の前に突然の強い光。眩しいだろう。

「姑息な」

目が眩み僅かに狙いが逸れる、壁に突き刺さる剣。

「四人がかりなんだからさ。そっちは」

「ぐ……」

まだ、光が目に残っている『騎士』

「君は危険だから」

鎌を『騎士』の首にかけた直後、鎌に大きな衝撃が走る。そんな近くは無いだろう。それなのに柄に当てるのか？

「まだ居たな」

次々と着弾する。割れた窓からはいくつもビルが見える。この部屋は狙撃する方にとっては都合がいい程場所には困らない。

狙撃から逃れると『騎士』がよるめきながら立ち上がる。

改めて狙撃手の腕に驚く。僕と『騎士』の立ち位置はそれ程離れてはいない。にも関わらず僕だけを正確に狙っている。

「く……」

狙撃手の腕に驚く前に逃げれば良かったな。

目を押さえながらも、僕の居る位置を見ている。

彼が視力を戻す時間をこれ以上与えない。

止まらなければ正確な狙いはつけられないだろう。左右交互に着地音を立て、壁や室内の物を薙ぎ払い壊しながら『騎士』に迫る。

空を斬る音、壊れる音、着地音。それらが彼の判断を鈍らせ、遅らせる。

それでも剣を構え、迎撃体勢を取る。

僕が気を付けなければならぬのは『騎士』に攻撃するその時。

狙撃手も『騎士』もその一瞬だけに集中しているだろう。

僕の間合いに入る。

『騎士』は本能でそれを感じ一歩踏み出し剣を振るう。

僕は半歩下がりを避け、そのまま鎌を振り上げる。

「ぐと……と何かが落ちる音。」

僕の手には確かな手ごたえ。

その感触を確かめる間も無く反転して、遠く狙撃手の放った弾丸が着弾。

「くっ……」

『騎士』の苦しそうな呻き声を上げる。

僕はそのまま部屋から走り去る。

「くそ……」

左腕を押さえる。血が止まらない。

「やられたな……」

真っ暗な室内。ようやく眩んでいた目も治り見渡す。

「無事か……お前等」

返事は無い。が、微かに動いている。

それだけでも良かった。体を起し無線で連絡を取る。

「……じゃ、後は頼むよ」

そのまま俺の意識が途切れる。

実感

短かった休暇も終わり、今夜も実戦訓練に励んでいる。

「ほらほら」

「くそ……ちよろちよると」

ワイヤーで逃げ回る妹を追いかけつつ俺自身も千佳の行く手を塞ぐ。

俺が千佳の間合いに入った瞬間。鋭い剣戟が襲いかかる。それをシールドで防ぎ、さらに間合いを詰める。

「貰った！」

右ストレート。躊躇わず顔を狙う。

「……まだ」

シールドと剣を支点にくるつと回り、
「遅い」

俺の左頬に見事な膝蹴りが入る。

「痛たた……」

気付けばベンチの上に居た。

「最後まで油断しない。これ、鉄則」

隣で悠然と喉を潤している鬼。いや千佳。

「解ってるよ。そんな事。というかもう油断なんてして無いぞ」

「そ、ならいいけど。じゃ、次」

颯爽と立ち上がり構える。

「よし」

俺も一口、水を含んで構える。

「じゃ、行くよ」

「来い」

千佳が右に飛ぶ。そのまま俺を中心に回る。

俺はその動きをじっと捉えたまま動かない。

「やつ！」

半周したところで間合いを詰めてくる。

着地直前にギリギリ剣が届く所からの横薙ぎ。

俺は半歩下がって避ける。

が、着地と同時に千佳の体が一回転し更に剣閃が伸びる。

遠心力が乗り重い一撃がシールドを通して左腕に響く。間髪容れず俺は妹の懐に入り連打を繰り返す。右ストレートから左ローキック。バックステップで避けられるが、まだ、俺の間合いだ。ローキックの勢いを使い、千佳の様に体を回して、左上段回し蹴り。

「その調子。兄い」

それも空を切り、

「大降り禁止」

残っている右足を払われて、

「はい。おしまい」

剣を首筋に当てられる。

首筋に冷たい金属の感触。

「まあまあだったね」

「偉そうに……」

今出来る精一杯の抵抗。

「ふふーん。何言っても負け犬の遠吠え」

否定出来ない。それが腹立つ。

「さ。立って立って。時間がもつたいない」

「言われなくても」

立ち上がり構える。

「はあく。立ち上がる時にさ、不意打ち狙う気は無いの？」

「正々堂々とするのが不満なのか？」

「兄い」

呆れた、と肩を竦める千佳。

「正々堂々と闘って勝てる相手？」

「いや……」

「でしょ？」

「そっこだよな……」

と、納得しそうになって、

「ちよつと待て。俺は闘う気は無いぞ」

「兄いに無くても向こうはどうなの？」

「それは……」

「だったら、立ち上がる時には不意打ち。はい。」

「何？」

「復唱」

「はあ！ 何で？」

「覚える為でしょうーが！ はい！」

「声がデカイ」

人通りが無いとはいえ誰が聞いているか解らない。指を口に当てて、声を抑える様にジェスチャーで伝える。

「はい！」

残念ながら伝わらなかった……

「起き上がる時は不意打ち！」

「…起き上がる時は不意打ち……」

「ん〜」

絶対に聞こえた筈なのだが、気に入らなかったのか、耳に手を当てて「聞こえない」とプレッシャーをかけてくる。

「起き上がる時は不意打ち」

「……」

さつきよりは声を張ったのだが、まだ気に入らない様だ。

「立ち上がる時は不意打ち！」

「よし。じゃ、続けよう」

……何か……

プライドとか自信とかが音を立てて崩れた様に思える。
構える妹。

「さあ。構えて」

千佳の声に構える。俺が構えを取った瞬間に飛び込んで来る。
「はぁあっ！」

振り上げた剣を振り下ろす。俺は一步後に下がり避ける。更に踏み込んで振り下ろした剣を振り上げる。更に後へ下がる俺。袈裟斬りから横薙ぎ。剣を返して、斜めに振り上げる。

「く……っ」

風を切る音が俺の体から数ミリ離れた所から聞こえる。紙一重で避けているのではなく、たまたまそうなっているだけ。あるいは、紙一重で避けさせられている。

「どうしたの？」

千佳の声に答える程の余裕が無い。

剣を止めるにもシールドを出せない。

今出来る事は、剣の動きに集中し体にある感覚を最大限に使って避ける事だけ。

「剣だけ見ても駄目だよ」

完全に無防備な足元を狙われる。

千佳の足払いを軽く飛んで避ける。

「先を読めよ。兄い」

飛んでいる俺に妹は容赦なく突きを出す。

「今のは良かった。その反応を最初から出していれば良かったのに」
「……え」

本能で反応したらしい。着地してから千佳の声で我に返る。シールドを出した覚えは無いが、現に俺はシールドで妹の攻撃を防いでいる。

「じゃ、行くよ」

剣を引いて、

「うおっ」

シールドの横、下、上から連続して繰り出される突き。

剣が俺の体を掠める。間合いを取ろうにも妹は離れない。俺が下がれば前に詰めてくる。

「……………」
次、左に来たら、さらに左に避け千佳の死角に入ろう。このまま
じゃいずれ追い詰められる。

……来た！

突き出された剣が引いた瞬間、左に飛び、

この至近距離。外さない。

狙いを定め発射をほぼ同時に行う。

「チツ」

悔しそうな舌打ちが聞こえる。

しゃがんで左手をワイヤーに当てて絡ませる。

しゃがんだ千佳の頭上で、妹の左手を中心に回転し、左手に絡み
つくワイヤー。

無言で睨み合う。

ワイヤーに繋がれたまま無言で睨み合う。

千佳との距離は……五メートル、と言った所か。

これ以上離れる事は無いが、近づけば俺の間合いに入る前に千佳の
間合いがある。それを切り抜けないと……

一応、ジャージは着ているが痛みはあるだろう。だが、それを顔
に出さない妹。

ジリジリとすり足で飛び込むタイミングを狙っている。

少しづつ弛むワイヤー。

千佳が自分の間合いのギリギリ外で足を止める。

牽制のワイヤーは千佳の手に絡まっている。

俺は左手を引いて妹の体を引っ張る。僅かに体勢崩す千佳。体勢を
立て直すが俺の方が早い。千佳の眼前で拳を止める。

「どっつ？」

勝ち誇った俺。

「良かった。シールドを巧く使ってた」

悔しいのか棒読みだ。

「うん。良かったんじゃない」

悔しそうな千佳。

「そう?」

対照的に嬉しそうな俺。

絡まったワイヤーを外して、袖を捲る。

「ん」

左手を出す。袖を捲ったそこは赤く腫れていた。

「まったく……素直に負けを認めたら我慢しなくてもいいのに」

「うるさい」

「ほら。座れ」

ベンチに座り消毒開始。

「痛っ!」

消毒の痛みに顔を歪める。

「いつももつとゆっくりしてあげてるでしょ!」

「こんなモンだって」

「違うって。私はもつと優しくしてるって」

「うるさいな。黙ってるよ」

消毒が終わわり、ぴしゃつと絆創膏を貼る。

「痛っ! 叩かなくてもいいでしょ!」

「大袈裟な」

目に涙が浮かんでる。

「泣くなよ」

「くそ……無性に腹立つ」

メラメラと鬨志が燃え上がる。

「今日はもう駄目だぞ。結構な時間だし」

時計を見せる。

「……この怒りは何処へやれば……」

「風呂入って忘れる」

「うっ」

唸る千佳を他所に帰り支度を始める。

「さてと。帰るか」

救急箱やペットボトルをバッグに入れて立ち上がる。

「うっ」

俺の後に唸っている千佳。

何故か俺の心は晴れやかだ。今日は良い夢が見れそうだ。

家に帰ってテレビを見てみると、先に風呂に入った千佳の叫び声が聞こえてきた。

おそらく、というか確実に傷口に石鹼かシャンプーがかかったのだろう。そんなベタな事をする千佳。明日はお隣さんに謝りに行かないと……

「詩月、強くなって無い？」

「そうかな？」

惚けてみるが、俺もそう実感している。

今は格闘訓練の授業。クラスメイト相手に模擬戦をしている。開始から一分弱で決着が着いた。

「そうだよ。秒殺された俺が言うのも何だけど」

「もう一回やる？」

「いい。遠慮しとく。俺の自信が無くなる」

立ち上がり、他の模擬戦が終わるのを待っている。

あの訓練も無駄にはなっていないかった。

千佳に勝った時はそんなに実感がわかなかったが、今は……

「よう、もう終わったのか？」

「ああ」

振り返ると玲斗が立っている。

「お前も？」

「ああ。次の相手はいる？」

「いや」

「じゃ……」

構える玲斗。

俺も構える。

玲斗の武器は槍。切っ先を下に向けて、グツと腰を落としている。その体勢のまま動かずに、俺が動くのを待っている様だ。シリツと半歩前へ。

俺の足が止まった瞬間に、踏み込んでくる玲斗。

玲斗の突きが繰り出される。

その早さは千佳よりも少し速い。

だが、向かい合った時のプレッシャーは千佳の方が上だ。

俺は冷静に切っ先を見据えて避けていく。

乱れる事の無い突き。上下左右。的確に狙ってくる。

シールドを構え、ワイヤーを玲斗のやや右に発射。すぐに起動を修正。

「チッ」

槍をワイヤーに向ける。

その間に俺は間合いを詰める。

槍で弾かれたワイヤーを巻き戻し、格闘に持ち込む。この距離では槍のリーチが活かせないばかりか俺の動きに対応できない。

「うわっ」

俺のパンチを避け、後ろに下がり間合いを取ろうとするが下がった距離だけ俺が詰める。

そのまま俺の攻撃に避けるだけの玲斗。

「これで終わり」

フェイントで俺は右手を振りかぶり、玲斗は槍でガードを固める。

だが、俺の狙いは足を払って倒す事。

「あっ！……最悪や」

と、倒れながら叫ぶ。

「ふう……」

焦る事無く闘えた。

それが何よりの進歩だろう。自分の力に自信を持つ。

「お疲れ」

壁際に休んでいると、琉奈が声を掛けて来る。

「そっちは？」

「まずまずかな」

銃関係は訓練の場所が違うから、お互い見る事は出来ない。

「玲斗に勝ったの？」

「見たたのか？」

「最後の方だけ」

「良いのか？そんな事してて」

「お使い頼まれて通りかかった時にちよつと見えただけ」

「公然のサボりじゃないか」

「違う。お使いの途中」

急いでいる様子の無い琉奈。

声を聞いて玲斗も来る。

「これで錬武優勝がまぐれじゃない事は証明出来たんだ」

「琉奈。コイツは元から強いし、明らかに前と動きが違う。多分自

主的にやってるぞ」

「真面目だね」

「……」

笑って誤魔化すしか無い。琉奈はともかく玲斗は何か感ずいているかもしれないが黙っていた方がいいだろう。

「今なら千佳ちゃんにも勝てるんちゃう？」

「それは千佳に言っちなよ」

タイムリー過ぎる。今言えば今夜が怖い。

「え？そう」

「何で笑う？」

「え。笑って無いよ」

「満面だぞ？自覚無いのか？」

「笑って無いよ。なあ？」

「うん。玲斗が意味も無く笑う訳ないじゃん」

いつの間にか結託している二人。

「今日も千佳ちゃんと帰るの？」

「……お前に関係無いだろう」

「じゃ、俺も一緒に帰るから、待ち合わせは……いつもみたいに校門やる？お前今日は掃除当番やから……解った待ってるわ」

「勝手に進めるな」

「お前の言いたい事は解ってる」

「何だ言って見る」

「千佳ちゃんと帰るのが楽しみやなー！」

「槍を手に取り、稽古相手を探しに行く。」

「私も校門で待ってよーと」

「おい。お前は関係無いだろう」

「あ。先生に呼ばれちゃった。じゃ」

「誰も呼んで無いだろ」

俺の声は届いた筈なのに無視される。

これもイジメに入るんだろうか？

下校時間。俺の後を歩いている一組の男女。

「帰りに何処か寄っていいところよ」

「何処行く？」

「この間のお店は？」

「何食おうかな」

階段を下り、出口とは違う方向へと曲がる。

「おい。沿おう字の邪魔だ。早く帰れ」

「解ってるよ。アンタが来ないと意味無いでしょ」

「何の？」

「色々な」

まだ、授業の事を言ってるのか……

「だから、それは何だと聞いているんだ」

「ま、それはゆっくりと聞こうじゃないか」

ガシツと両手を掴まれて下駄箱へと引きずられていく。

「何やって……」

琉奈と玲斗に引きずられてきた俺を見て固まる千佳。

「じゃ、千佳ちゃん帰ろうか」

俺の手を離し、千佳と並んで歩いて行く琉奈。

「あ、はい」

どこかおかしいと感じながらもついて行く千佳。

「両手に華だな」

「男が多いだろ」

浮かれ気分な玲斗。そして、

「知ってる？千佳ちゃん」

「何ですか？」

「詩月が強くなった事」

前置きも無く本題へ。

「へ〜。そうですか」

自分との訓練の成果が出ている事に嬉しそうだ。

「授業でも負け無しですか？」

「玲斗が軽く」

「へ〜」

振り返って俺達を見る。

「千佳ちゃん。何か知らない？」

「さあ……」

答えられないだろう。千佳も琉奈も。

「で、今日はちょっと調子に乗っている詩月を千佳ちゃんに懲らしめてもらおうと」

「……懲らしめる？」

その言葉に反応する。昨日の事を忘れていなかった。

「そう。その為には千佳ちゃんの力が必要だ」

「解りました。お手伝いします。何かからしましょうか？」

「おい。何するつもりだ」

「それは……」

「恐い……恐すぎる……その口の歪みは……」

「まずはお茶でも飲んで作戦考えよう」

琉奈の一言に三人が同意する。俺は反対したのだが聞いてくれな
い。

「当然。兄いの奢りで」

「え、マジで？」

「見てくださいよ。これ」

喫茶店に入つてすぐに左手の袖を捲る千佳。

「どうしたの？」

包帯が巻かれた左腕が痛々しい。原因は俺にあるのだが。

「昨日……兄いに……」

クスン、クスン。と嘔泣きを始める千佳。

「おい。嘔泣きは止める」

「お前千佳ちゃんに何したん」

横に座っている玲斗が、千佳の左腕を見ながら聞いて来る。

「何って……」

「痛がる私を無理矢理……」

三人同時に嘔出す。

「ば……何言つてんの！ お前！」

くすん、と指で目頭を押さえる。

「そんな奴だとは思わなかったな。詩月君」

千佳の冗談を解ってくれる玲斗。

「アンタ……何したの？」

カップの中の紅茶が波打っている。

「馬鹿。冗談に決まってるだろう」

「そうですよ。琉奈さん」

琉奈の隣に座っている事の張本人が、笑顔でコーヒーを飲んでい

る。

「ホントに？」

まだ、冗談だと信じていない。

「ホントですよ。これは昨日兄いと模擬戦やった時の怪我ですよ」
昨日の事を説明する。

「マジで？」

「ホンマに？」

どれだけ疑おうと、千佳の左腕が証拠になる。

「ま、今日はボコボコにしてやりますけど」

口調は笑っているが目がマジだ。

「は。何でまた」

「何が？」

「実戦訓練。そんなに成績悪く無いだろ」

「うん」

答えに困る。それは琉奈と千佳も同じらしい。

「ん？ あれ？ お前等知ってるんか？」

俺と同じリアクションの二人を見る玲斗。

「お前には関係無いよ」

「うわっ！ 冷たっ！ 俺に出来る事なら何でも言えって言ったや
ん！」

店を出てからも玲斗がしつこく聞いてくる。

「……関わりとロクな事にならないぞ」

「構わん。言うてみい」

「どん、と胸を張る玲斗。」

「いいの？」

自分の胸を叩いている。おそらく「言え」との事だろう。

「いいのか？本当に後悔しないな？」

「お前もくだいな。早よ」

「……でもな」

「言えや。……引つ張るな」

「いいの？ ホントに？ 後悔しない？」

「大丈夫やって！ ほら、ドーンと！」

「いいじゃないですか。教えて上げれば」

この声に驚いたのは俺と琉奈。その様子を敏感に感じ取った千佳と玲斗。

「やあ、久しぶりですね」

「……どうも」

にこやかな男が立っている。

「僕は何もしませんよ？」

「アンタが『死神』？」

千佳が口を開く。

「そうですね。貴女は？」

「アンタがちよっかい出してる男の妹」

「詩月君の妹さんですか」

流石の千佳も緊張している。

「そちらの彼女はお見かけした事がありますね。後はそっちの彼は？」

「詩月の親友です」

「親友ですか？」

「そうですね、何か？」

くす、と笑う『死神』の態度が気に入らなかったのか、玲斗が一歩踏み出す。

「そう言えるのが羨ましいと思ひまして」

「一ついいですか？」

「何ですか？ 詩月君」

「何が目的なんですか？」

「目的……？」

「何が目的で警察を襲っているんですか？」

「……知りたいですか？」

嬉しそうに笑う『死神』。

「知って後悔しませんか？」

俺達のやり取りを繰り返す。

「知れば何かを失うかも知れませんか？」

「何を……」

「それは貴方の問題です。僕には解りません」

背中に汗が浮かぶ。

本能が危険を伝える。千佳も玲斗も琉奈もいつでも逃げ出せる体勢を取っている。

「そうですね……今までの平穩。自由。法の庇護。友人。その他……言い出せばキリがありません。でも、手に入る物もあります」

「……何が手に入るのかは分かりませんが、払う方が大きいと思うのですが」

「それだけの価値があると考えれば釣り合いますよ」

「そんな事……」

「人によって価値観は変わります。僕の理由はそれだけの価値があると僕は思っていますよ」

「価値観が人によって変わるなら俺の失う物の価値も貴方とは違う」「そうですね。僕は全てを失ってしまったからここにいます。僕は何も無い。これから先も失う物が無い。だから、平和に暮らしている君達とは違うのかもしれない」

悲しげに遠くを見る様な目。

「ま、ここで価値観について語っている場合では無いので、ではまた」

丁寧に挨拶して去っていく『死神』

その姿が見えなくなるまで俺たちは動かなかった。

ようやく見えなくなると、

「ふー」

全員が一斉に息を吐く。

「何か、変な汗掻いた」

「私も」

千佳と琉奈が声を揃える。

「あれが……？」

「そ」

知った事で頭を抱える玲斗。

「知らなきゃ良かったろ」

「今更言われてもな」

力無く笑う玲斗。

「でも、俺に出来る事があるなら……」

「あると思うか？」

「無い」

きっぱりと断言。

「だろ」

「兄い！」

声の感じからして嫌な予感。

「何弱気になってるの！ 早く帰って模擬戦。闘るよ！」

何が妹のテンションを上げているのだろうか？ 玲斗でさえ気圧されるプレッシャーを受けたのに。

「ほら！ 速く！」

駆け足……いや、ダッシュで帰ろうとする千佳。気付けばもうかなり進んでいる。

「……頑張れ」

力無く微笑む玲斗とガッツポーズを作る琉奈。

「……ありがとう」

玲斗と琉奈に励まされて千佳の後を追いかける。

慣れてきた？

夜、いつもの公園。

「やああ！」

いつもより気合の入った千佳の一撃。

剣戟が響く。ギリギリと音を立てるシールド。

すっと千佳の懐に入る。だが、牽制の攻撃は避けられない。体勢すら崩れない。

一瞬の間。

千佳の体が仰け反る。直後に下からの蹴り上げ。

顎の先に千佳の靴が掠る。

一回転する千佳。今度は千佳の間合いでの攻防。

切っ先と千佳の体の動きを見て、先を読む。

上下左右からの斬撃、少しでも俺が後に下がれば間合いを詰める為突きを出す無駄の無い攻め。

前にも出れず、後ろにも下がれない。

相手の隙を待つか、作るか。待つ事で失敗する事はこれまでの経験が物ガたっている。

……なら。

いつも通り鮮やかに舞う様に剣を振るう。

シールドで剣を弾く、そのままワイヤーを発射。避けながらも剣を振り出す。が、戻ってくるワイヤーを警戒している為にスピードが無い。一気に詰める。だが、戻ってくるワイヤーと俺との挟撃をしやがんで後ろに飛んで回避される。

「ふー」

息を整える千佳。

もう何度この状況になったのか？

今夜の公園で繰り広げられる兄妹による実戦訓練は近所の人か通りかあった人、どちらかによる警察に通報、駆けつけた警官からの

逃走。という形で幕を閉じる。

警察に追われて家に帰る。

「ふー。疲れたあ」

「まったく、何でこんな目に……」

悪態を吐く妹。

「流石に振り回しているんだから」

「それ位は解るよ!」

「怒鳴るなよ。あ、そうだ」

「何？ 私と話すのがそんなに嫌？」

「何で喧嘩腰何だよ。さんに連絡しないと」

「あ、そうか」

怒りを納める妹。

「じゃ、私は先にお風呂に入ろつと」

さつさと自分の部屋に入っていく。

ケータイを取り出し、さんの番号を選ぶ。

「じゃ、お先」

「うい」

風呂に向う妹に返事しながら、さんが出るのを待つ。

「……？」

出ない。何でだ？

電話を切る。何となくテレビを点けて、チャンネルをニュースに合わせる。

「……無いよな」

さんが関係していそうな事件はなかった。

と言うか、どんな事件に関係しているのか知らない。多分『死神』関係だとは思うが、それらしいのは無かった。

チャンネルをあちこちを変えて見るが、

どのチャンネルも同じ様な汚職事件を取り上げている。

もう一度、さんのケータイに掛けてみる。

何度も繰り返し返されるコール。

数十回聞いた後で切る。

興味の無いニュースを見ながら、頭の中は さんの事で一杯になる。

何故電話が繋がらない？

考えられる理由は……

今現在何かの任務についている。

その為に出られない？

それが一番可能性が高い。

それは何か？

あるいは……

考えたく無い状況を思い浮かべてしまう。

そんな事は無い、と否定するが頭の中にあの男が浮かぶ。

「『死神』」

不意に口に出る。

だとすれば『死神』は今日俺達の前に姿を現した。

昨夜、もしくはもっと以前に両者の間で何かあったのか？

何か、とは？

それはほぼ確実に戦闘。

その結果『死神』が現れ さんは連絡が取れない。

「何考えてるの？」

「うわっ！」

「何よ。そのリアクションは？」

「あ、いや……急に声を掛けるからビックリしたんだよ」

「そう？」

気付けば千佳が前に座っている。

「で、さんは何て言ってた？」

事情を話す。

「マジで？」

「嘘吐いてどうする」

「何かニュースとかあったかな……」

「テレビじゃそれらしいのはやってなかった」

「じゃ、新聞取ってくる」

新聞を取ってくる千佳。リビングにそれを広げてこの十日間の事件を調べる。

「無いね」

「こつちも」

「情報規制？」

「その可能性もあるな」

「という事は……」

考えたく無い考えが浮かぶ。

「相手はやっぱり……」

千佳の言葉に答えない。それが肯定だ。

「……うわっ」

テーブルに置いてあったケータイが鳴る。

その音に驚く俺達。

「誰？」

驚いた事を隠す様に怒鳴る千佳。

「……着信は。」

「さんだ」

急いで出る。

「もしもし」

「よう。どうした？」

俺達の心配を他所に呑気な声が聞こえる。

「いや……どうしたも何も……無事なんですか？」

「まあ、何と云うか……無事と言えば無事だしそうじゃないと言え
ばそうだし」

言いたい事がよく解らないが。とりあえず無事な様だ。

「で、何かあったのか？」

「はい。今日の夕方……」

『死神』に会った事とその時の問答を報告する。

「ふーん。全てを失ったからここにいる。か……」

「そう言っていましたよ」

「で、それ以外には？」

「それだけ言っただけで去りましたよ」

「そっか……」

電話の向こうで考えているのが解る。

「さんは何かあったんですか？」

「ん。俺か？」

「なかなか出ないし」

「ああ……ちょっと監視が厳しいからな」

「……監視？」

また物騒な言葉が出てきた。

「何したんですか？」

「何したと言うか……されたと言うか」

さんが答えないでいると、その後から女性らしき声が聞こえる。

声の感じからして怒っているのが解る。

「ああ……解ってるって。そんなに怒るなよ。すぐ戻る。……ああ、

ああ。俺が悪かった」

明らかに謝っている。

「あの」

「後で掛ける」

「そう言った直後に聞こえたのは、

「駄目です」

「あ、ちょ……」

切れる電話。恐らく取り上げられたのであろう。

「どしたの？」

「あ、うん。」

「とりあえず千佳に報告。」

「ま、最悪じゃなくて良かった」

「それはそうだけど。電話するのに人目を気にしなきゃいけない状況ってどんな時だ？」

「うーん」

天井を睨みながら考え込む千佳。

「何か任務に失敗して監査の目に止まったとか？」

「知り合って間が無いけど、さんはそんな失敗はしないと思う」

「というかさ、さんの任務って何？」

「そう言われても、俺に解るわけが無い。」

「さあ？」

と、答えるのが精一杯だ。

「何だと思う？」

その目は好奇心に満ちている。

「うーん」

今度は俺が天井を見上げる。

『騎士団』の任務も色々あるからなあ。

「フリージア王国」「ディスクレート皇国」「ウイスダム聖国」「ライタウス連邦」「フィランソロフィ王国」が結んでいる五カ国同盟内の反政府行動やそれにより悪化した治安回復。五カ国同盟会議の護衛や災害救助。当然同盟国がその他の国による侵略を受けた場合の防衛。反政府組織の捜索及び壊滅、逮捕。

「何だろ？ テロ関連じゃないか。やっぱ」

「そうだよね！」

「何でそんなに嬉しそうなんだ」

「これが喜ばずにいられる？ 『死神』逮捕に協力すれば『騎士団』に認められるかも」

うふふ、と笑う千佳。コイツにそんな野心があったとは。

「お前、『騎士団』に入りたかったのか？」

「ううん。別に」

「じゃ、別に『騎士団』に認められなくてもいいだろ」

「馬鹿だなあ、兄いは」

「何で？」

完全に見下された一言に。カチン、とくる。

「だって『騎士団』だよ？ 皆知ってるよ？ そこに認められるんだよ？」

「だから、それが何だって聞いてるんだよ」

「就職とか進学に有利じゃん」

「……」

俺の聞き違いか？

「バイトだって一発だよ？」

マジで言ってるのか？コイツは？

「もう時給なんて言い値かも」

ししし、と変な笑い声を上げる千佳。

「あ、あのな……もうちよっと。こっ」

あるだろ？他に。

「ん？ 何？」

心がどこかのバイト先でバイトしている千佳。「これいくら？」

と言えば適当な値段を言いそうだ。試しに言ってみよう。

「これいくら？」

「七四〇円です」

どこでバイトしてるんだ？ それに何その微妙な値段設定は？

可哀相だが千佳を現実に戻す。

俺を見る目は屈託が無くキラキラと輝いていた。

「それが目的で模擬戦やったの？」

「ううん。兄いの事が心配だって言ったじゃん」

「あ、そうだけど……」

「ま、それが前提でそうなれば良いな。て思っただけ」

「あ……そう」

「何？ その間は」

「……風呂入る」

「私はもう寝るよ。お休み」

「ああ、……お休み」

鼻歌を歌いながら自分の部屋に戻っていく千佳。
兄として何となく妹の将来が心配だ。

「ふー」

電話を切る。思わず出るため息。

「何かツコつけてるんですか？」

目の前にいる怖い顔した女が俺を睨む。

ここは「メイシテイ総合病院」のロビー。

見張りの目を盗んで詩月に連絡を取っていたら見つかってしまった。

「そんなに睨むなよ」

「睨まれる様な事をする方が悪いんです」

俺を部屋へと追い立てる。

「解ったから」

座っていたベンチから立ち上がり部屋へと向う。

「まったく」

「何か言いましたか？」

何か言えば怒られる。右手を引っ張られて連れていかれる。

「ヘレン。あのお」

俺の腕を引っ張る女『ヘレン』に声を掛ける。

「何でしょう？」

「自分で歩けるからさ……」

「そうですか」

「聞いてちやいない。」

「歩きにくいんだけど」

「そうですか」

「見ているナース達が笑っている。」

「はい。着きましたよ」

ドアを開け、ベッドへと連行される。

「まったく……もう少し自覚と言うものを持ってください」

「解ってるよ」

「いいえ。解ってません。解っているのですしたら私が見張りにつく事も無かったでしょう」

「何も言え無い。」

「相手を甘く見た訳では無いでしょうが……」
「言つなよ」

「そんな事は解ってる。俺の左腕が無い事は。」

「……なら、もう少し大人しくして下さい」
「善処する」

「ベッドから見上げる天井。」

「ふー。まるで子供ですね」

「うるさい。子供に善処なんて言葉が言えるか？」

「屁理屈こねて……」

「俺は寝る。帰れ」

「私もそうしたいのですが、朝まで見張れ、との任務が届いたので」
「はあ？」

「ヘレンがバッグから任務状を取り出す。」

「わざわざ作ったのか？暇だな『上』は。」

「目の前に差し出された任務状を読む。」

『騎士ヘレン・エルバは ・ハーメルを監視する事を命ずる』

「その後、続く連名と印鑑は紛れもなく本物。」

「マジで？」

「不本意ながら」

「本気で嫌そうな顔をしている。」

「では、私はナースにこの事を伝えて来るので」

「その続きを言わずにドアの前から俺を睨む。」

「テレビ」

「愛想笑いで誤魔化しつつテレビを点ける。」

「では」

「静かに部屋を出ていくヘレン。」

「やれやれ」

目をテレビではなく窓の外に向ける。

テレビの音声は聞こえずに、詩月からの電話の内容がぐるぐると頭の中を回っている。

「目的か……」

確かに解らんない。

『騎士』や国家権力を相手にしてまでやるうとする事とは…何だ？何がそこまで突き動かす？あの男には後ろ盾となる組織は恐らく無いだろう。それはこの間の俺達に寄る襲撃の後、あの部屋を捜索したヘレン達からの報告だ。

「ここでいいです。はい。ありがとうございました」

声に気付いて隣を見ると、もう一つベッドがある。

「……あ、どうも」

ヘレンとナースが運んできたのだろう。

「わざわざ……」

持ってこなくても。

「私に何処で寝ろと？」

床。と答えたかったが、その後どうなるかは容易に考えられるので止めておく。

「じゃ、私はもう寝ますので」

電気を消される。

「あの……」

俺は一日中ベッドの上に居たので眠くは無い。

「おやすみなさい」

俺の意見を聞かずにさっさと寝てしまう。

しょうがないのでテレビのポリウムを落として眺めている。

しかし、思い描くのは片腕での闘い方。

何度も何度もシミュレートする。

相手はあの男。しかしその結果は常に俺の敗北で終わる。

そして、朝。

隣で寝ていた筈のヘレンの姿が無かった。

昨日は良い夢が見られたのか、ゴキゲンな千佳とのジョギングが始まる。

最初の頃と比べると千佳に離されない。

「結構速くなったね」

「そうだな。息もそんなに上がらなくなったし」

「もうちょっと延ばす？」

「そんな事したら時間が無くなるぞ」

「それもそうだね」

朝の支度をし学校へ、

「よ」

後から声を掛けて来たのは玲斗。

「おはよ……ん」

千佳と声がハモる。

「あははは……仲良いな」

「おはよ……どうしたの？」

睨み合う俺達を不思議そうに眺めている琉奈。

「聞いてくださいよ。琉奈さん」

「ん？ 何」

「この兄いは人に恥搔かせて喜んでるんですよ」

「俺が悪いのか？」

「当然」

「何で？」

「私に恥を搔かせちゃった罪」

「またそれ？」

俺に鞆を押し付ける千佳。

それに続いて押し付けていく玲斗と琉奈。

「はい。よろしく」

パタパタと走っていく三人。

朝走ったのにまだ走るのか？

「お前等ちよつと待ってって」

追いかける俺と逃げていく三人。

朝走ったのにまた走る羽目になるとは……

三人に押し付けられた鞆と自分の鞆。四つを持って後を追いかける。

「……どう？」

夕食も終わり、模擬戦を行うためにいつも公園の様子を影から窺う。

「駄目。警察が見張ってる」

様子を窺っている千佳が顔を半分だけ出して公園を見ている。

「じゃ、帰るか」

「駄目」

「警察が居るんだろ？無理だろ」

上着の裾を引張られる。

「もうちよつと様子を見よう」

「こそこそと隠れていると、」

「ちよつと」

ほら。こうなる。

「ここで何を……」

声色は優しいが、明らかに警戒している。

当然だと言えば当然の反応だ。俺達二人、武器を持っているし、明らかに挙動不審だ。

「えつと……」

答えに詰り千佳を見ると、いつの間にかケータイで話していた。

「うん。それで……うん、うん。ちよつと待って。何？」

え、何してるの？ コイツ？

「あ、お疲れ様です。何か？」

電話口を押さえて警官に声を掛ける。

「この辺りに不審者が出たらしいので、その警戒に」

「あ、そうなんですか？」

驚いて見せる千佳。それは俺達の事だと思っただが……。

「で、ここで何を？」

「あ、ちよつと、散歩していたら電話が掛かって来たので話して
たんですけど」

「あ、そうですか。じゃ、ちよつと協力して欲しいんですけど……」

「はい。出来る事なら」

「お名前と許可証の提示を」

「ちよつと待つてください。……はい」

俺も同時に出す。受け取って確認する。

「……はい、どうも。兄妹ですか？」

「そうですねよ」

にこやかに対応している妹を眺める俺。

「でも、散歩するには……」

剣を見る。

「最近は何騒なので」

物騒を強調する。

「はあ……」

答えに詰る警官。

「あの、不審者ってどんな感じの人なんですか？」

「最近、その公園で武器を振り回しているらしいんですよ」

「へ〜。顔とかは？」

「目撃者がいなので何とも言えないですね。

じゃ、気をつけて。不審者を見かけたら警察へ。では」

敬礼をして去って行く警官。

姿が完全に見えなくなつて、

「場所変えよつか」

「何処行く？」

パチン、とケータイをしまつ。

「お前、いつの間に電話したんだ？」

「して無いよ。フリだけ」

「……」

「ん？ 何」

改めて妹の凄さ、と言うか神経の太さを思い知った。

当ても無く、フラフラと夜の街を彷徨う。

「は。良い場所無いね」

「まあ、駅前だしな」

ちらほらと通り過ぎる人を眺めながらベンチに座っている。

「どうしようか？」

だらしなく足を伸ばしている千佳。

「また、警官から職質受ける前に帰った方が良いんじゃない？」

「うーん。そだね」

ベンチから立ち上がり、「うーん」と体を伸ばす。

「じゃ、競争！」

走り出す千佳。それを見届けてゆっくりと歩き出す俺。

「……元気だな」

前夜

夜の散歩を楽しみながら歩いている。

どこかの物陰に隠れていると思っていたのに出てこない千佳。

「ま、静かで良いな」

見上げる夜空に光る月と星。その光が照らす街を歩く。

ちよつと詩人を気取ってしまう。

「これも運命か」

雰囲気の良さそうな公園が目に入る。

通らなくても良かったのだが、フラフラと吸い寄せられていく。

人気の無い公園にぼんやりと光る外灯。

敷石が敷き詰められた歩道。その両側には名前は解らないが綺麗な

花が咲いている。

「澄み渡る夜空の下では誰もが詩人になれる」

言った自分が恥ずかしい。

「そうですね」

……声に出てたのか……そして、聞かれてしまった。

「恥ずかしがらなくても良いじゃないですか」

……無理だろ。

「詩月君がそんなに感受性が豊かだとは思いませんでした」

……この声は。

「今晚は」

顔を上げた瞬間、緊張が走る。

「そんなに警戒しなくても良いじゃ無いですか」

いつもの様ににこやかだが、いつもより冷徹に見える。

手に握られている鎌。

「ああ。これですか。さつきちよつと」

言われなくても解る。騎士が警官は知らないが闘ってきたのだろ
う。

「で、詩月君は？」

「俺は……」

貴方と闘うかも知れないのでちょっと訓練を……等と言える訳が無い。

そんな事を言えば、どうなるか……

「ふむ……どうやら追いつかれた様ですね」

「え……」

「そんな物を持っている以上、君も闘う気なのでしょう？ほら、気を抜いてると」

え？

俺の後から殺気が迫ってくるのが解る。

「！」

振り返ると細い剣を構えた女性が向ってくる。

「退けえ！」

「善良なる市民に向って言う言葉では無いですね」

軽口を叩きながらも対応する。

剣を突き出したままの勢いで突進する女性。

それを避けながらも鎌で薙ぎ払おうとする『死神』。お互いが交差し立ち位置が変わる。

女性は『騎士団』の制服を着ている。それで女性が『騎士』だと解る。

という事は。

「人質か？」

冷静な女性。

「まさか」

笑う『死神』。俺を庇う様に鎌を構えている。

「じゃ、仲間か？」

「まさか」

「そつだろつな。お前はどこかの組織に使われる様な人間じゃないな」

じゃ、個人で動いているのか？

「目的は何だ？」

「さあ？」

「答える気が無いのか？それとも理由が無いのか？」

「さあ？」

「まあいい。捕らえれば幾らでも聞けるだろう」

切っ先をこつちに向ける女性。

「の仇を返させて貰う」

やはり さんの知り合いだった。

そして さんの身に何かが起こり、それに『死神』が関係している事が確定となった。

「何をしたんですか？」

震える声。最悪の事態ではないとはいえ、電話すらろくに出来ない状態なのは間違いない。

「さあ？ どうなったかのは確認していないので」

笑いを含む声に、頭の中で何かが弾けた。

「人を傷つけて何が可笑しいっ！」

シールドを構え、背後から飛びかかる。

「一時の感情に身を任せるのは……」

振り返り、鎌の柄を突き出す『死神』

それを直前で右手で掴んで、体を回転させて、

「はぁ！」

左手で裏拳。

「良い反応ですよ」

後に下がって避ける『死神』。だが、そこからワイヤーを発射。至近距離からの追い打ちに、

「チッ！」

舌打ちが聞こえた瞬間、『死神』の姿が消える。直感で、

「下……」

左手を下げて、牽制。

読み通り『死神』はしゃがんで間合いを詰めようとしていた。ワイヤーの牽制で動きが鈍り、その隙に俺は後に下がり間合いを取る。

「流石……と言っべきなのでしょう？」

顔は笑っているが、声は冷徹だ。

「さあ？」

自分でも驚く程冷静だった。千佳との模擬戦が役に立ったのだから？ 感じている殺気や緊張感はその比では無いが。

「二対一……と言っ事で良いのかしら？」

俺と『死神』との攻防を見守っていた女性が今度は仕掛ける。

「まだ、居たの？」

「ええ、捕らえるまでは」

振り向き様に薙ぎ払おうとするが、女性はしゃがんでそれを避け、地を蹴りさらに間合いを詰める。

「この間合いならっ！」

接近戦では長い柄が邪魔で対処が鈍くなる。

繰り出される突き。それを体の動きだけで避ける『死神』。タイミングを計り、鎌を女性に向け、一気に後ろに飛ぶ。

鎌の柄が牽制となり一瞬躊躇する。

「これで後からの攻撃は無くなった」

『死神』の言う通り、俺の横には女性が居て俺達の正面に『死神』が居る。

女性は細身の剣を構えたままだ。

「どうする？あの『騎士』の仇を討つ？」

笑っ『死神』。

乗るな、これは挑発だ。単純な挑発に乗るな。詩月。冷静に、相手のペースに乗せられるな。

「仇を討つのは違っわ」

俺が答える前に女性が答える。

「『騎士』である以上負傷や死を覚悟している筈。にも関わらず仇

討ちを考えたり行つのは『騎士』のやる事では無い」

「では聞くが『騎士』の任務とは何？ 自分の保身しか考えていない貴族や政治家を守る事？ 王家の存続しか興味が無い王族？」

「かなりの偏見があります、概ね間違いいではないわ」

……『死神』の言葉を肯定する。恐らくこの女性も『騎士』だと思つのだが、良いのか？

「じゃ、何？」

「他の『騎士』は知らないが私は『弱者』を守る事を優先しています」

「ほ。立派ですね。他の『騎士』に聞かせてあげてください」

「興味無いですね。言つたでしょ。これは私のやり方。これを強制する気は無いつて」

迷い無く言い切る女性。

「では、私からの質問です。目的は何？」

「僕の？」

「他に誰がいますか？」

惚ける『死神』に対して冷静にツッコむ女性。

そのツッコミに戸惑いながらも答える。

「……僕の目的か……貴女の事を聞いておいて何だけど答える必要があるのかな」

「無いですね。なら、その理由を作るだけです！」

突進する女性。

「僕の事を放つといてくれれば……」

俺も女性を援護する為にワイヤーを発射。

「二対一と言う数的有利を使えば！」

「良い判断ですよ。詩月君」

突きを後ろに飛んで避けるが、ワイヤーからは逃れられない。

鎌を使つても左右どちらに避けても女性の攻撃からは逃れられない。

『死神』が鎌でワイヤーを払う。

その瞬間を狙い、女性が更に詰めていく。突き出される剣を鎌の柄を使い弾いていく。

「詩月君。君は僕の『敵』になるのかな？」

女性の突きと俺のワイヤーの同時攻撃を避けながらも、まだ余裕の問い掛け。

「解らない。でも、人を傷つけて笑ってる貴方を許せない！」

「下らない正義は身を滅ぼすよ」

「人を傷つけて笑うよりは……」

「仕官学生とは思えない台詞だね」

女性の突きを再び弾く。

女性が弾かれた剣を構えるより速く、『死神』の鎌が払われる。

「クッ！」

「遅い」

鈍い音と共に弾き飛ばされる女性。

地面に叩きつけられ、苦しそうに息を吐く。

「自分の事を考えたらどう？」

「え」

目前に『死神』の姿。牽制のパンチを放つが避けられる。

その直後、目の前には地面があった。

「く……っ」

酸素を吸う度に体中が軋む様だ。呼吸がこんなに苦しいとは思わなかった。

「詩月君、君はどうして士官学校に入ったんだ？人を傷つけるのが軍人の仕事だろう」

「……」

答え様にも声が出ない。

「なのに、君はそれを許せないと言う。その手にある物は傷つける為にあるんじゃないのか？実際に君はそれを使っただろう。傷つける為に」

「……」

答える事が出来ない。

「……詭弁を」

俺の変わりに立ち上がった女性が答える。

「そうかい？」

「ああ。彼を迷わす為にそんな事を……」

「だとしたら？」

「貴方の性格は……」

また剣を構え起動し、突進する。

「最悪だっ！」

「同じ事ばかり……」

今度は後に下がらずに前に出る『死神』

女性が突きを出すより速く鎌を振る。

立ち上がる事も出来ない俺、それでも出来る事を考える。シール

ドを構えて、照準を合わせる。狙うは、振り払われる鎌。

女性に当たる直前に俺のワイヤーが鎌の起動を逸らす。その隙に

一気に間合いを詰める。

弾かれた鎌を戻す間も無い。

突き出される剣。

その瞬間、俺には『死神』が笑った様に見えた。

静寂の公園。ポタポタと何かが垂れる音が響く。

月明かりを浴びた二人の影。

「……油断、したかな」

余裕のある声でそう呟く『死神』。

「それでも無いでしょう」

凜とした声でそう呟く女性。

「い……っ」

少しづつ体を離していく『死神』。

そしてゆっくりと距離を取る。

「……ふう」

右腕から血が流れている。

「まったく……一張羅なのに」

傷口を押さえる事も無く、恨みがましい口調だが口元は緩んでいる。

「その手では戦闘は無理な筈。もう大人しく……」

「まだだ。僕にはやる事があるんだ。それが終わるまで僕は止まる訳にはいかない」

左手で構える。

「それなら今度は左手を潰します」

右手を引いて、切っ先と左手で間合いと照準を合わせる女性。

「君はどうする？」

「え……」

「闘うか退くか。二択だ」

確かにこの状況じゃそれしかないだろう。

戦況は『死神』が右腕負傷。隣にいる女性が有利。

ここで退いてしまえば『死神』の言葉に対する答えを放棄する事になると思う。

武器は闘う為の道具。相手を傷つけ殺す物。

そんな事は解ってる。それでも、俺はそれを避けたいと思う。自分でも矛盾している事は解っている。だから『死神』に言われた時は何も言えなかった。

ここに居てもその答えが得られるとは思えない。しかし、居る事で何かが掴めるかも知れない。

シールドを構えて、俺の答えを示す。

「良いのか？」

「はい。『死神』に言われた事は俺も知りたい事ですから」

「……」

『死神』の雰囲気が変わる。

数的に有利なのだが動けない。それほどのプレッシャーを受けている。

来る。そう感じた瞬間、

「おい。何処行つたー」

この声は……千佳？

「おい。兄い……ん？」

緩やかなカーブを描いた遊歩道に千佳の姿が見える。そして、俺達を見た瞬間掛け出す千佳。

その気配を感じ、振り返る『死神』

「く……っ」

響く剣戟。切り上げた剣を鎌で受ける『死神』

片手の『死神』と両手の千佳。

ジリジリと罅迫り合いを演じていると、

女性が突進。

千佳から離れて女性の横に回りこむ。

女性が千佳の前を通り抜ける。

「……しっこい」

『死神』の一言。

「誰がっ！」

ワイヤーを放つが鎌でそれを打ち落とされる。その間に間合いを詰めて接近戦に持ち込む。

「君達だよ！」

柄を突き出して俺を牽制するが構わず突っ込む。

柄を避け体を捻り伸びたワイヤーで牽制。

「クッ」

それを避け体勢を崩す。

女性が『死神』の首に剣を当てる。

「終わり」

見上げる『死神』

その目にはまだ余裕がある様にも見える。

「……何が？」

笑う様な、試す様な。そんな顔で問い掛ける。

「……………」

答えられない。『死神』の異質なプレッシャーに思考が停止している。

それは俺だけじゃなく、女性も千佳も同じ様だ。

「ふふ」

そんな『死神』に対し俺達は武器を構える事で対抗する。

「これ以上はお互い闘う事は出来ないと思うけど？」

俺達の戦意が無くなった事を見抜いている。

「だからと言って見逃す事は出来ない」

「まったく……『騎士』と言うのは」

肩を竦めて「呆れた」と表現する。

「生まれつきです。今更変わりません」

自分の戦意を鼓舞している様にも見える。

「もし生まれ変わる事がるのならもう少し大人しくなれる様に祈ってあげるよ」

「私もそうなる様に祈る事にします」

お互い武器を起動し構える。

張り詰めた空気。息をするのも躊躇う空間。

更に張り詰める空気、それが一気に弾ける。

真っ直ぐに腕を伸ばし突き出される剣。

回転し遠心力を乗せて振り払われる鎌。

光が混じり、金属音が響く。

折れる剣。それを握り締めたまま立ち尽くす女性。視線の先には

『死神』がいる。

「……………」

構えを解いて、これ以上闘う意思の無い様だ。

女性も睨んではいるが殺気は無い。

「今夜は終わりにしよう」

ビームを切り、微笑む『死神』

そのままどこかに行こうとするのを引き止める。

「あ、貴方の目的は一体」

震える声で問い掛ける。

「知りたい？」

振り返り、試す様に俺を見る。

……是非。と答えたかったが声が出ない。

「僕は明日、軍の演習場に行く」

「何？」

女性が反応する。

「そこで『フリージア王国軍提督。レイス・ライアム』を殺す」

それが決定事項だ。と言う様に自信に満ち溢れた声だった。

「じゃ、また明日」

去って行く『死神』を追いかける事も出来ずに立ち尽くす。

「ふー」

息を吐く女性。

「あの」

「ああ、今更だけど、怪我は？」

「あ、はい。お蔭様で」

「それは良かった」

心配してくれている女性の声。

「ちよっと、兄い」

グイグイと袖を引っ張られる。

「……誰？」

本人は小声のつもりなのだろう。が。

「私は『ヘレン』エルバ』騎士団に所属している。君達は？」

「俺は『立花詩月』でこっちが……」

「『立花千佳』です」

ペコッと頭を下げる。

「詩月君と千佳さんか。私の事はヘレンでいい。君達には色々と話

があるんですけど…」

「はあ」

何となく予測はつく。

「まずは との関係から」

街で『死神』に出会った事。

その時に さんと知り合った事、度々『死神』と会う事。それから言わなくても良かったと思うのだが『夜の模擬戦』までを話した。
「なるほど」

話し終わってから、しばらく考え込んでいたヘレンさんがそう呟いた。

「でも、『死神』も調子に乗りすぎですよ。強いのは認めるけど軍の施設に攻撃する事を言っちゃたんだから」

「確かに。ヤツは単独で動いている事は間違いない」

千佳とヘレンさんが『死神』の行動について話し始める。

「いいのか？ そんな事話して？ 情報漏洩じゃないのか？
「軍のトップを狙う事を宣言するとは」

何故か關心している様に見えるのは何故だ？

「じゃ、軍に通報して警備を厚くすれば何も問題無いじゃないですか」

「それは……うーん」

腕を組んで考え込む。

「あ、そうか。『騎士団』と『各国の軍』は縄張り争いがあるんですよ。素直に聞いてくれないですよね」

おい……言いにくい事を笑いながら言うなよ。

千佳の後からヘレンさんに頭を下げる。

……こっちが気を使う。だから少しは考えて喋ってくれ。

「ま、確かにそれはあるけど」

苦笑しながらも千佳の言葉を肯定する。

「だからと言って見過ごす事は出来ないでしょ」

「あ、私達も手伝いますよ」

あつけらかんとしている千佳。

何でそんなに楽しそうなの？ お前？

「それは……」

目が「止めてくれ」と言っているのが解る俺と解らない千佳。

「言ったじゃないですか。兄いが『死神』に魅入られちゃったから
どうにかしないとイケないって」

「それは……」

千佳のこじつけと勢いに戸惑っているのが解る。

俺はヘレンさんに加勢する。

「千佳。あのな、一般人の俺達が軍の演習場に入れるわけ無いだろ
？ そんな事して見る。逮捕されるかもしれないぞ」

「大丈夫だって」

満面の笑みで言い切る。

「その根拠は何処にあるんだよ」

「大丈夫って信じてるから。だから大丈夫だって」

「捕まるんだぞ？ 学校も退学になるかも知れないんだぞ？」

「いいじゃん。それ位」

目が本気だ。

ヘレンさんは俺達の会話を聞いて笑うのを堪えている。

「……面白いな。君達は」

面白いと言われるのは心外だ。

面白いのは俺じゃなく千佳の方だろう。

「面白いのは兄いですよ。私は近所では慎ましいと言われてるんで
すから」

この場合、慎ましいじゃなくお淑やかの方が正しい、と思う。

それにお淑やかだと思っているのは本人だけで近所さんには「元
気な妹さんね」と言われている。

「ちよつと、兄い。私の評判を言ってあげてよ」

「さんはどうなんですか？」

助けてくれた恩人を利用してはいる様で気が引けるが話を換えよう。

「ちよちよちよちよ……兄い。話変えないでよ」

「どうなんですか？」

「命に別状は無いよ。左腕切断したただけだ」

「……え」

切断……？

「え、それじゃ……」

「戦闘は無理だな。まあリハビリ次第でどうにかなるかも知れないけど」

この女性もあっけらかんとすごい事を言う。

「死ななかつただけ大丈夫ですよ」

何でそんなに風に言えるかな……もうちょっと考えて喋れよ。

「そうだな」

千佳の言葉に深く頷いて同意するヘレンさん。

この人も千佳と同類なのか？

だとしたら、さんも俺と同じ苦労をしているのかも知れない。そう考えると妙な親近感を感じる。

「ん？考え事？」

「あ、いえ」

「何？ 言えない事？」

流石は妹。鋭い一言だ。俺は、
うん。

等と言える訳が無い。

「何故あんな事を言ったんでしょうか？」

「あんな事？」

「犯行声明……犯行予告。て言うのかな。この場合」

「どっちよー！」

「論点はそこじゃない」

恨めしそうに睨みつける千佳。その目を虫してヘレンさんに問い掛ける。

「さあ」

俺達をこれ以上巻き込みたくないとしているのか、口が重い。

これ以上関わらせたく無い。というヘレンさんの気持ちは解るが、
「千佳が言った通り『騎士団』と『各国の軍』とは縄張り争いがあるから、そこを突いての奇襲を狙っているのかも」

試す様に見ているが、目は少しだけ驚きを含んでいる。

「おお。どうしたの？ 兄い」

素直に驚いてくれる千佳。

「関わる気か？」

頷く俺と千佳。

「お前は関係ないだろ」

「あるよ。毎日模擬戦やってたじゃない」

口を尖らせて嬉しそうに喋る千佳。

「駄目」

「いいよ。私は勝手にやるから」

もう止まらないよ。この女。

「……ふう。何を言っても」

首を振って説得を諦める。

「はい！」

元気よく頷く千佳。嬉しそうだ。

「ま、あの男が言った事は誰にも喋らない事。それと来るのは良いけど自分の身は自分で守る事。それだけ」

「解つてますよ」

「じゃ、私は帰ります。明日遅れない様に」

「お休みなさい」

帰っていくヘレンさんに大きく手を振っている千佳。

振り返り小さく手を振ってくれるのが嬉しいのか、

「ヘレンさん！」

「止める。馬鹿」

遠めでもクスクスと笑っているのが解る。

ヘレンさんも姿が見えなくなっているから、

「決めた、私『騎士団』に入る」

腰に腕を当て深く頷く千佳。

そして進路が決定。

「ま、頑張れ。いつまでその決意が続くのか楽しみだ」

「五年後には兄いを顎で使ってあげるよ」

「何その微妙な年数？」

何故かありそうだと感じてしまう。

「楽しみにしてなよ」

ポン、と俺の肩を叩いて、

「さ、帰る。早く帰って寝て、朝から『演習場』に行かないと」

もう日付は変わっている。ため息を吐いて、

「そうだな」

千佳の後について行く。

終焉

あれから数時間。陽が昇り始め明るくなる空の中、私は病院へと向っている。

「……ふう」

もう何度ため息を吐いただろうか。

これから状況説明する事を考えると、

「……はあ」

ため息が止まらない。

「どうやって」

私の言い分を通す？

……無理っぽいな。相手は彼だ。

何となく見上げた先にぼんやりと空を見ている男がいる。大人しくしている様だがそのままだと良いな……。

「解った。俺も行く」

やっぱり無理だった。

「何処へ？」

ベッドから降りて剣を手取る。

とりあえず今私に出来るのは時間を稼ぐ事だけ。

病室に入る前に打っておいた対策を行うには時間が掛かる。

「早く行こう。あ、詩月達にも連絡入れないと」

「彼等は一般人ですよ」

「それで止まる様な奴に見えたか？」

「いいえ」

どちらかと言うと妹さんの方が。と言い掛ける。

「だろ？ なら、早く行かないと。軍の連中と揉めてたら面倒だ」

貴方を止めるのも面倒なのだが……。

と言ってしまうみたい衝動に駆られる。

それをグツと喉で止めて、私は余裕を見せてテレビを点ける。

「そんな事してる場合かよ。ほら」

「ま、そんな急がなくても」

「だから、詩月達が…」

扉をノックする音で話を止める。

来た！ そう直感する。

「どうぞー」

私が部屋に招き入れる。

「失礼します」

入ってきたのは『ゴツイ騎士達』

「な……」

あまりに予想外だったのか固まる。

「……」

五人の『ゴツイ騎士』達が入ってくる。

パチン、と指を鳴らして、

「じゃ、言った通りをお願いします」

「はっ」

「え、何？おい……なんだよ」

五人が に群がり、手際よく縛っていく。

「じゃ、後は頼みます」

「はっ！」

五人が声を揃えて返事してくれる。

その内の一人が、

「これを……」

折れた剣の代わりを持って来てくれた。

これで本部へ取りに行く手間が省けた。

「ありがとう」

それを受け取りホルダーにセット。

これは官給品なので頼りない気もするが、それは気にしな事にする。なにせタダだし。

「おい！ちよ……」

喚いている　を置いて部屋を出る。

トイレに入り鏡の前で目を閉じて、スーと息を吸って吐く。
目を開けて鏡の私を見る。

「大丈夫……」

久しぶりに緊張している私。

それを解すためにやっていたおまじないを久しぶりにやってみた。

我ながら情けないと言うか何と言うか……

鏡の私が微笑んでいる。

それに頷いて返してトイレから出て行く。

暗い室内。そこで陽の光を頼りに包帯を巻いている。

「こんなトコかな」

公園で受けた傷の手当を終え、一口水を飲む。

「ふー」

血は止まったが痛みはそのまま。

右腕をぐるぐると回してみる。

「……っ」

痛みはある、だが動かせない事は無い。

「あの三人以外は使わない方がいいか」

希望だが、本気でそう思う。

立ち上がり、体を伸ばす。

「ん……」

時計を確認して、

「後は、これの調整をして」

武器を手に取り、メンテナンスを始める。

「後は……」

カチツとボタンを押して、起動確認。

いつも通りに光を放っている。

最後に水を飲み干し、

「行くか」

カップをそのままに部屋から出て行く。

……帰ってこれるかな。

……らしくない、感慨にふけるなんて。

苦笑しながら雑踏に紛れて行く。

「思ったより……人いないね」

「その方が良い」

「それもそうだね」

俺達は今、『メイシテイ軍演習場』前にいる。

目の前には基地内に通じているゲートがある。その前には俺達を睨む様に立っている警備兵が。その手には銃が持

たれている。

それもその筈。俺達も武器を持っている。

そんな警備兵に愛想笑いをしながら、

「時間早かったかな？」

「そうかも」

公園での一件の後、直に家に帰りそのまま仮眠。三時間後千佳に叩き起されて今に至る。

「時間ぐらい教えてくれても」

腕時計を確認しながら、ぶつくさ文句を言っている。

「すいませーん」

何を思ったのか警備兵に、

「あの、偉い人は何時来るんですか？」

「馬鹿！ …… すいません。 すいません」

「何謝ってるの？ …… ちょっと引つ張らないですよ」

「ちょっと来い」

そのまま引つ張ってゲートの外へ、

「アホか？ お前？」

「何が？ 解らない事を聞いたんじゃない？」
文句ある？と挑戦的な態度。

「アホ。変に警戒されたら色々面倒だろ」

「大丈夫だつて」

その根拠は何処にあるんだ？

「君達そこから離れて」

怖い顔した警備兵から声を掛けられる。

「あ、すみません」

千佳の腕を引っ張って行く。

「ここまで離れなくても」

「おい。あれが見えないのか？」

いつの間にか集まっていた報道陣。

「おお。映るかな？生かな？」

髪を指で梳いて整える。

「映りたいのか？」

「……さあ？」

ニヤツと笑う口元。

……映る気マンマンじゃないか

「さ、何時でもいいよ」

誰もお前を待つて無いよ。と言いたいのがこれ以上警備兵に睨まれるのは嫌なので言わない事にした。

「お、来たぞ」

その声にゲートの正面を見る。

確かに軍用車に護衛された高級車が一台来た。

「来るかな？」

「だろうな」

俺達は身構えて『死神』の襲来を待つ。

車に群がる報道陣。

ゆっくりとしたスピードで基地に向う車。

まだ、基地までは距離がある。

先頭の車が基地に入る。

続いて高級車が入ろうとした瞬間、
報道陣から悲鳴が上がる。

「行くぞ」

「了解！」

千佳と二人飛び出して行く。

「抵抗しなければ死なずに済んだのに」

警備兵を斬り、車の前に立つ。

「邪魔をしないでくれ」

報道記者達から沸きあがる悲鳴。それが僕の声搔き消す。

次々と降りてくる兵隊達。

僕の声が聞こえ無かった様だ。銃を構える兵達に向い鎌を振るう。

血と悲鳴が飛び交う中、最後通告を行う。

「邪魔するのなら殺すよ」

それでも向ってくる。

「言ったよ。僕は」

撃つ間など与えない。

構えた瞬間に間合いを詰め、薙ぎ払う。

護衛されている車の中に目的の人物がいるのを確認。

どうやら彼等は来ていないのか？それとも間に合わなかった？

そんな事が頭を過ぎる。

どうでもいいか。僕は僕の目的を……

護衛をしていた車が邪魔で車で逃げる事は出来ない。だから、車から降りて基地内へ逃げ様としている。

その最短距離を駆け抜ける。

「終わりだ」

僕の間合いに入り、鎌を振り上げる。

パニックを起している人混みが邪魔で進めない。

「うわ！ ここにも！」

一人が俺達を見て、騒ぎ出す。

その瞬間、神が与えてくれた奇跡なのか俺と『死神』との間に人がいなくなる。

大体の目測で距離はギリギリ。

照準をつけている暇は無い。

「気を逸らせれば」

ワイヤー発射。

神はもう一度俺に奇跡を与えてくれた。

「な」

「うお。兄い。凄い！」

振り上げていた鎌にヒット。その衝撃で鎌が弾かれる。

それで『死神』が俺達に気付く。

「やはり」

「来たよ！」

一気に間合いを詰めて、剣を振るう千佳。

「君も」

「当然！」

下がっても詰める千佳。それに俺も加わる。

千佳の攻撃後の隙を俺が埋める。そしておれの隙も千佳が埋める。

その連続攻撃を凌いでいく『死神』

「く……」

苦しそうだが、目にはまだ余裕が見られる。

俺達の攻撃の後、その後から突き出される剣。

「遅れた？」

「君がいたな！」

ヘレンさんが俺達の攻撃に加わる。

三人による波状攻撃に耐え切れず、

「流石に……これは」

後に下がり、そのまま走り出す。

『死神』は基地内へと逃げ込んだ提督を追いかけて行く。
その後を俺たち三人も続く。

邪魔な警備兵を斬り倒し、基地内を進んで行く。あの怯えた顔を見た瞬間から、もう殺す事に意味は無いと感じて

いる。

だが、そうしないと僕の目的から外れる。

意味の無いジレンマを抱えてまた立ち塞がる兵を斬る。

何処に居る。早く見つけないと…。

「何処？」

「知るか！ 探せ！」

手当たり次第にドアを開ける。

両側の壁に飛び散った血の後と通路には倒れている兵士。その後を追いかけているのだが

『死神』の姿は見えない。

「……まったく」

ドアの前に倒れている兵士をどけて部屋を調べる。

「いた？」

「いない。何処に？」

廊下の奥から剣戟と悲鳴が聞こえた。

「急ごう」

頷いてヘレンさんの後を追いかける。

迂闊だった。こうなる事予測していなかったな。

部厚そうな隔壁の前に立ち尽くす。

どうする？ 戻る？

……あの三人に鉢合わせるな。

かといって他に道は無い。

倒れている兵士に聞こうにも……返事が無い。

「しょうがない」

倒れている兵を抱き起して、

「ゴメン」

と謝る。

近づいてくる足音。タイミングを計って、

兵士を投げつける。

「うわっ！」

「あそこ！」

廊下の奥、壁の前に一人立っているのを見つける。

「……一人？」

ヘレンさんが何かに気付いた様だが足を止める事は無い。

「何か様子が……」

変だ、と思った瞬間、倒れこんできた兵士。

「うわっ！」

飛び退くヘレンさん。

その背後から、光る刃が襲い掛かる。

「ち」

倒れてきた兵士を避けた為に反応が遅れる。

「ヘレンさん！」

俺は一步進んでシールドを展開。

左手で受け、ビームを中和。そのまま体を回転させて、右裏拳を

放つ。

「が……っ」

手応えアリ。追い打ちを掛ける。

壁に飛ばされた『死神』を追いかけて、左上段蹴り、

「く……」

体勢を崩しながらも避ける。

空を切る蹴り。今度は俺の体勢が崩れる。

鎌を振りかぶっている『死神』に向って行く千佳。

速い剣を鎌で受け流し、そのまま俺達の来た方向へと走り出す。

「ちっ」

へレンさんが悔しそうに舌打ちし、俺たちもその後を再び追いかける。

「……この状況は」

何と言うか……。

「武装解除、してもらおうか」

基地の中庭、という所に出た俺達を待っていたのは……

銃を構えた『軍の兵士』達。

俺達は今すっかり取り囲まれている。

「えっと……」

どうするよ？ 兄い。と目で訴えかけてくる千佳。

……俺も困ってんだよ。と目で返事。

ふっ。と息を吐いて、目を兵士に向ける。

良かった。どうやら通じたようだ。

「私は『騎士団』所属で……」

へレンさんが説得に当たるが、

「それなら何故事前に襲撃の事を知らせなかった？」

「それは……」

言った所で何の対処も講じなかった。と言いたいのを堪える。

「今日知ったので、通報する間が……」

申し訳無さそうに言うへレンさん。

大きな範囲での間違いは無い。

確かに知ったのは今日だ。もう十時間以上前の事だけ。

「それで君達はこういう経緯でこの事を知ったんだ？」

「あの男が最近、こここの警察施設を襲った犯人で私達はその犯人を追いかけて来た。それで今日になって追い詰めた

のですが後一步の所で逃げられてしまつて……その時に」

表情は申し訳ない。だが、目は違つてた。

「こうしてる間にも……」

兵達の意識を『死神』に向けようとする。

「それは解つてる。その前に君達の身分照会が先だ」

ヤバ……そんな事されたら余計に面倒になる。『死神』を追いかける事が出来なくなる。

「うわーっ!!」

上から落ちてくる声に思わず身を屈める。

運良く木の枝がクツションなり、命に関わる様な事は無さそうだ。

「どうした?」

駆けよる兵士。

「う、上に……」

目が恐怖で震えている。

落ちてきた兵の震える指の先には、

「アイツ……!!」

口を歪め微笑んでいる『死神』が。

「退いてください!」

俺は叫びながら兵隊達の囲いを突破する。

「おい、まだ……」

「話は後で聞いわ」

「じゃ、お先でーす」

また建物内に戻り、上を目指す。

「ふー」

この階の警備兵はあらかた……。

と、思った矢先に、

「おっと」

向つてくる剣を避ける。

「不意打ちとはまた……君達には正々堂々と言う言葉が無いのかな

？」

手を広げ、余裕を見せる。

「お前！」

振りかぶり向ってくるが、大振り。

難なく避けられる。

これじゃ、彼女たちの方が優秀だ。

「もっと鍛えたら？」

喚きながら剣を振る。

「でも、もう無理かな」

起動し、振り切った後の無防備な腕を斬り払う。

腕を斬られた痛みとショックで気を失い、そのまま倒れる。

残念だけどここには彼を介抱する者はもういない。

階段を駆け上がり『死神』がいた階に到着。

「ハア……ハア……」

膝に手をつけて息を整える。

「ハア……」

通路の先にいる。見えないがそう確信する。

整いつつある呼吸がプレッシャーで乱れる。

「……ふー」

深く息を吐いて呼吸と精神を落ち着ける。

「よし」

まだ来ていない二人。足音からもうそこまで来ていると思うが俺は待たずに先に進む。

「やあ」

微かに聞こえる呻き声の中鎌を片手に立っている『死神』

「……これも貴方の目的の為ですか？」

「提督が逃げなければこうはならなかった」

それはそうだろう。だが、そうでもない。

「提督が逃げなくても、彼等は提督を守る為に貴方と闘ったかもし

れない」

「そうだね。それが任務だから」

足元に倒れている兵達に目を向ける。

「それなら、彼等を守る為にも提督は対策を講じるべきじゃないのか」

「それを貴方は待ちますか？」

「待たないよ。でもそうする事は出来た」

武器を構えている相手に交渉も何も無いと思うのだが。

「追いついた……！」

二人が追いついてきた。これで三対一。

構える間も無く、『死神』が間合いを詰める。

「ちっ！」

横に飛ぶ俺と後ろに飛ぶ千佳とヘレンさん。薙ぎ払われる鎌の軌道は俺達じゃなく壁に突き刺さる。

「何を……」

俺と千佳、ヘレンさんの間に防御壁が下りる。

「しまった！」

「兄い！」

駆け寄ろうとするが『死神』の攻撃に足が止まり、その間に完全に防御壁が下りる。

ドンドンと叩く音と千佳の声が響く。

「く……」

迂闊だったとヘレンさんの声が聞こえる。

「これで君一人だ」

震える体を抑えて、構えをとる。

「あ、貴方の目的は？」

「もう教えてもいいかな」

一呼吸置いて、

「革命だよ」

成功を確信した冷徹な目で告げた。

……革命？それが目的なのか？

「ふふ…信じられないか？そうだろうね」

キョトンとした俺を満足そうに眺めている。

「馬鹿な……」

「やって見ないと解らないよ」

自信に満ち溢れた目。

「一人で？」

「人数が多いからと言って成功するとは限らない」

「少ないからと言って成功するとも言えないでしょう」

「それもそうだ」

ニヤニヤと笑う『死神』

「本気でそんな事を…」

「当然だろ。だからここにいる。解ったかな？僕の邪魔をするのならば……」

構える『死神』

「王にでもなるつもりですか？」

「そんな事に興味は無い」

「なら革命を起す理由は何ですか？」

「新たな時代に進む為に必要な儀式だろ」

「は」

新たな時代？

「笑うトコじゃないんだけど」

更にキョトンとした俺。

「時代に不満でもあるんですか？」

「無いよ」

「なら、革命など意味無い……」

俺が言い終わる前に、

「意味はある。世界が変わるきっかけになるかも知れない。僕が『フリージア王国軍提督』を白昼堂々と暗殺すれば

それは世界の均衡を崩す事になる。そうなるか……」

「『フリージア』は他国の謀略だと言い出す」

そうなら五カ国同盟関係にヒビが入る。

「外交でのやり取りが上手くいかない場合は…どうなるかは解るだらう？」

戦争に発展する可能性が……

「それが……」

「ま、そうならない可能性もある。その場合はどこかの偉い人が僕のターゲットになるだけだけど」

「それを喋ると言う事は」

「君とはここで別れた」

俺も構えた瞬間、

「じゃ、さよなら」

痛めている筈の右腕からの攻撃。

「くっ……」

速い。ギリギリでの受けが限界だ。

「流石。ここの兵達より良い反応だ」

「何を」

左手に鈍い衝撃を堪える。

怪我している筈の右腕。力はそれほど無いが、それでも遠心力を加えた一撃にギリギリと音を立てて軋むシールド

。

この間合いは俺の方が有利か……。

シールドをずらして更に詰める。

「お」

驚いているが、余裕を感じる。

正直気に入らないが、力の差を考えれば当然の反応。

右腕を曲げ、拳に左手を添えての肘打ち。

「でも、まだまだ」

体を捻って避けられる。

避けられるのも予測通り。俺の正面に『死神』が立つ。

左手を伸ばし、至近距離からのワイヤー発射。

「これならっ！」

躊躇わずに撃つ。

「……………」

距離にして一メートル。

直撃だと思った瞬間、『死神』の姿が消え、ワイヤーが壁に当たる。

……………マジ？

「今は…ヤバかったかな？」

避けられた？この距離を？

「そんなに驚く様な事でも無いよ。ソレは直線にしか飛ばないから読みやすい」

「だとしても……………いくら直線に飛んで行くとしても射出スピードは？ それなりに速いんだけど？」

得意そうに微笑みながら、

「指先の動きに注意すればどうって事は無いよ」

何て集中力……………俺との力の差を改めて実感した。

しかし、今ここにいるのは俺一人。誰にも頼れない。

静かに息を吐いて、精神を落ち着ける。

「どうすればいいか考えろ。『死神』とまともに闘っても勝ち目は無い。」

となれば、何か考えないと……………。

「慌てた次の瞬間に落ち着けるとは……………君の精神構造はどうなっているのかな？」

気にするな。自分のペースを貫け。

俺一人で『死神』に勝てる方法を。

……………俺……………一人？

違う。ここに居るのは俺と『死神』と……………、

「何を思いついたのかな？」

そつだ。ここには『提督』がいる筈。

隠れて出てこない『提督』を探している途中の筈、それとも場所は解っているが何かの事情があつて出てくるのを待

っているのかは解らないけど……。

俺にも僅かに勝機が出てきたかな。

『死神』が『提督』を襲う一瞬が勝負。それまでの間何としても『死神』の攻撃を凌がないと。俺にそれが出来るか

？

それなら、

先手を取る方が主導権を握れる。だが、守りを重点に置いて攻める。俺はシールドを前に間合いを詰める。

虚を突かれたのか、余裕を見せているのか簡単に懐に入れた。

見上げる『死神』の顔は笑ってる。

後者の方が……上がったテンションが下がりがけるが、攻撃を繰り返す。

「動きが直線的過ぎる」

余計なお世話だ。上段、中段、下段。俺なりに流れる様に攻めているが、

口元を弛めながら避け続ける『死神』

……本気で腹立つ。

いや……落ち着け。この攻撃の目的は俺の攻撃パターンを『死神』に見せる事。

「このっ」

更に攻める。

「面白いね、君は。攻めながらも心は守りにある」
「ばれてる。だが、

「これでっ……」

渾身の上段蹴り。

それを避けられて、

「隙が大きい」

鎌が襲い掛かる。

シールドと右手で鎌を抑える。そのまま、

「また、裏拳？」

読まれているが、構わずに左手を振り抜く。

左手の起動上には、もう『死神』がない。

「危ない、危ない」

俺を侮ってくれる方が良いが、何か腹立つ。

息を整え体勢を立て直す。

「もういい？ 今度は僕から行くよ」

何てスピードだ。

シールドを前に後ずさる。

「ほらほら」

もう起動していない鎌。バッテリーが無いのか？それもそうだろう。

う。これだけの人を斬れば無くなる。残っている

残量は後一人分てトコだろう。

「攻めて来ないのかな」

俺の最大の反応速度では偶然にも紙一重で避けている。一瞬も気を抜けない。抜けばその瞬間に終わる。

振り下ろされる鎌の一撃にシールドが下に弾かれる。

振り降ろした鎌が、間髪容れずに、

「終わりだ」

振り上げてくる。

避けられるか？ ……顎を後に逸らせれば避けられる。間に合う

か？

「この」

顎先に風を感じた。避けられた？微かに見える『死神』の顔。そ

の表情から、良し、避けた。と実感する。

後に倒れて行く体、夢中で足を振り上げる。

「な」

珍しい『死神』の驚く声。

無意識の反撃が虚を突いた。

が、それも避けられる。

「うわっ……と」

両手両足をガバツと床についての着地は無様だがこの状況ではどうでも良い事だ。直に立ち上がり体勢を整える。

『死神』は構えを取らず、ただ驚いた表情で俺を見ている。

体勢を整えていない『死神』を攻めたいが躊躇する。

戸惑っている間に体勢を整えた『死神』睨み合う。と言うか俺の方が動けない。

このプレッシャーは今まで感じた事の無い強さだ。動けばどうなるか…と考えると悪い答えしか思っ浮かばない。

頭を振り、息を吐いて心を落ち着かせる。

どうするかなんて事はもう考えてあるだろ。

後はそれを完遂するだけ。落ち着いて、冷静に。

「君は本当に面白い」

「何がですか？」

「焦り追い詰められた次の瞬間には冷静に落ち着きを取り戻し状況を把握している」

そりゃ必死になるだろ。この状況じゃ。

「思わず僕の目的を忘れてしまいそうだ」

言い終わると同時に攻めてくる。

左手一本で鎌を持ち、回転して遠心力を乗せてくる。

俺もタイミングを合わせて『死神』の反対に回り、

左腕に受けた衝撃は先程の比では無い。

ガキイイイン……！ と響く金属音。

「っっ」

腕が痺れる。が、それで止まる訳にはいかない。

鎌に体を押し付けて前が出る。

鎌を振り上げればその瞬間にワイヤーを発射するし、そうしなくても左手一本の力ならどうって事は無い。

相手の武器を封じたままの攻撃。

俺も動きを制限される為に一撃必殺とはいかない。ワイヤーを使いたい衝動を抑えての牽制。

俺の考えはバレいるだろう。それでも動かないのは、俺の行動が正しい事の証明。それと勝利を確信した時にでる

油断を待っている

のは間違いない。

お互いが一瞬の致命的な油断を待ちつつの至近距離の牽制を続ける。

俺の待つ『死神』にとつての油断。それは

『提督』が出てきた時。その瞬間、注意はそっちに向けられる。チャンスを活かさないと

全てが無駄になる。

当たりはするが力が入りきらないのでダメージは少ない。

外から何か大きな音が聞こえてくる。何だ？

「上か？」

『死神』が後に下がる。

「逃がすか！」

俺も前が出る。

「しつこいな！ 君も！」

鎌で牽制してくるが、構わずに行く。

廊下を駆けぬける。奥に開いたドアがある。

「見つけた」

嬉しそうに呟く声が聞こえる。

「！」

驚き振り返った『提督』

鎌を振りかざして起動し、そのまま……。

「間に合えっ！」

ワイヤーを発射する。狙うは……

「甘いな、詩月君。……これで」

躊躇い無く振りぬく『死神』

「な」

ワイヤーの軌道を修正し、壁に当て、ほぼ直角に曲げる。

「ぐっ……」

ダン、と壁に叩きつけられる『死神』

俺はそのまま『死神』に駆け寄り、鎌を遠くに蹴り飛ばす。

「ハア……ハア……」

息が上がる。勝ったのか？ ……いや、まだ油断は。

うつ伏せに倒れたままの『死神』

撒き戻したワイヤーを向けたまま、近寄る。

不意に『ある言葉』が頭に浮かぶ。

後一步の距離で突如起き上がり、俺の顎を狙った蹴り足。

「やっぱり！」

警戒していた俺は後の飛び退く。

「これを避けられるとは……」

千佳との模擬戦での言葉『起き上がる時は不意打ち』のおかげと
は言い辛い。

「ふー、これまでかな」

両手を挙げて降参を意思表示する。

「そんなに警戒し無くても。もう本当にやらないよ
疑っている訳じゃないのだが油断はしない。

と言っか出来ない。

「兄い！ ……あれ？」

千佳と、

「ん？ 何だこの状況は？」

ヘレンさんが追いついて来た。

「遅かったですね。もう僕は彼に負けた後とは」

両手を拳げながら二人を挑発する『死神』

「この状況でよくそんな事が言えますね」

「ふふ……」

本気で闘う気が無いのか、大人しく手錠を掛けられる。
キツと睨みつけるヘレンさん。

「あ、そうだ。詩月君。君に聞きたい事があるんだけど」

「何ですか？」

「昨日言った事の答え」

「……」

昨日行った事……それは『俺が闘う理由』

「それは……まだ解りません」

「だろうね」

何が嬉しいのかは解らないが微笑んでいる。

それを怪訝そうに見ている千佳。

「ま、そんなに簡単な事じゃ無いし」

まるで俺が悩んでいるのが楽しそうに話を進める。

「でも、いつか解る時が来ると思います」

「だといいいね。その事に気付かないまま終わる連中もいる。君はそうならない様に気をつけると良い」

廊下の奥から複数の足音が聞こえてきた。

「動くな！」

銃を構えた複数の兵達。

こっちの状況を理解するのに少し戸惑っている。

「君の答えを聞けないのが残念だ」

「……え」

どういう意味で言っているのか解らなかった。

「じゃ、僕はこれで」

一緒に遊んでこれから家に帰る。といった雰囲気で呟く。

気付いた時には『死神』の喉元から赤い血が流れていた。
え……何を……

思考が止まる。意識が真っ白になる。倒れる『死神』の動きがスロ
ーモーションに見える。

ドサッと倒れてもこの場にいる誰も動かなかった。

「え……何……これ？」

啞然としている千佳。

「……何って」

それ以上言葉が続かない俺。

倒れた『死神』の回りは赤く染まっていく。

へレンさんはじつと『死神』を見つめている。

「き、君達は……」

『提督』が声を掛けるがそれどころではない。

「私達は……」

へレンさんが事情を説明している間ずっと『死神』を見ている。

その顔は微笑んでいる様子にも見える。

混乱している思考なのに色んな事が頭の中を駆け巡る。

『死神』が俺に残した問いの答え。

それがどんな形になるのかは解らない。

でも、それを見つける事の出来る人がいるのだろうか？

いたとしてもそれは俺とは違うだろう。

だから、俺の答えは俺自身で見つけないと。

「……大丈夫？」

千佳が心配そうに声を掛けてくる。

「ああ」

頷いて答える。

何か聞きたそうにしているが、俺に気を使っているのか、

「そ」

短く返事して、前を見る。

「これから大変そうだね」

「人事だと良かったんだけど」

「そももいかないよね」

「……ああ」

『提督』や銃を構えた兵達に説明しているヘレンさんを後から見ている。

どうやら俺達の事で揉めている様だ。

「では、詳しい事は後程」

敬礼し、クルツと回れ右で回転。

「じゃ。帰ろうか」

「いいんですか？」

「いいんだ」

ヘレンさんの後について行く俺達。

「兄い」

「何」

「絶対騎士になる」

「あ……そう」

何となくそう言つと思つた。

「ま、頑張つて」

「言われなくても」

その会話が聞こえていたのか、ヘレンさんが振り向いて、

「君はどうする？」

……どうしようかな。

天井を見上げて考える。

何処までも続く空。その下に並ぶ建物。

「どうした？兄い？」

黙りこんだ俺を見る千佳。

「何でもないよ」

その答えで納得したのか、それ以上は聞いてこなかった。

「彼」がこの何処までも続く道の先で何を見て、何を感じ、考えたのかはもう知る事が出来ない。

…でも、一方的な力で何かが変わっても意味が無いと思う。

「…まずは卒業する事が大事かな」

今決められるのはこれだけ。

「…はあ？」

呆れる妹と、笑うヘレンさん。

くあとがきく

いかがでしたでしょうか？ 若干の修正を加えての掲載です。
感想待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9905b/>

メイシティ

2010年10月10日06時09分発行